La mer

昭和 48 年 11 月

日仏海洋学会

La Société franco-japonaise
d’océanographie
Tokyo, Japon
投稿規定

1. 報文の投稿者は原則として本会会員に限る。
2. 原稿は簡潔にわかりやすく書き、図表を含めて印刷ページで12ページ以内を原則とする。原稿（正1通、副1通）は、東京都千代田区神田訃河台2-3 日仏会館内 日仏海洋学会編集委員会宛に送ること。
3. 編集委員会は、事情により原稿の字句の加減訂正を行なうことがある。
4. 論文（欧文、和文とも）には必ず約200音の英文（または仏文）のAbstract（Résumé）をつけること。
欧文論文には英文（または仏文）のAbstract（Résumé）のほかに必ず約500字の和文の要旨をつけること。
5. 図および表は必要のみに限る。図はそのまま写下になるように適度に黒インクで書き、論文の図および表には必ず英文（または仏文）の説明をつけること。
6. 初校は原則として著者が行なる。
7. 報文には1編につき50部の刷刷を無料で著者に送わたる。これ以上の部数に対しては、実費（送込を含む）を徴収する。

Rédacteur en chef
Yutaka IMAMURA (Tokyo University of Fisheries)

Comité de rédaction
Michibei HOSHINO (Tokai University) Makoto INOUE (Tokyo University of Fisheries) Yoshimi MORITA (Tokyo University of Fisheries) Tadashi NAGATA (Tokyo University of Fisheries) Minoru NISHIMURA (Tokai University) Gohachiro OISHIBA (Showa College of Pharmaceutical Sciences) Yoshio SUGIURA (Meteorological Research Institute) Kazunori TAKAGI (Tokyo University of Fisheries) Kenzo TAKANO (Institute of Physical and Chemical Research) Masahide TOMINAGA (Kagoshima University) Yutaka UNO (Tokyo University of Fisheries) Seiichi WATANABE Isamu YAMAZI (Tokyo University of Fisheries)

RECOMMANDATIONS A L'USAGE DES AUTEURS

3. Le Comité de rédaction se réserve le droit d'apporter, le cas échéant, des modifications mineures aux manuscrits ainsi que de demander aux auteurs de les corriger.
4. Des résumés en langue japonaise ou langue française sont obligatoires.
5. Les figures au trait seront racontées à l'encre de Chine noire sur papier blanc ou sur calque. Les légendes des figures et des tableaux sont indispensables.
7. Un tirage à part des articles en cinquante exemplaires est offert gratuitement aux auteurs. Ceux qui en désirent un plus grand nombre peuvent les faire établir à leurs frais.
On the Sand Ripple Generated by Standing Wave and the Threshold Movement Sand

Tomosaburo ABe and Masakazu ARAI

Abstract: On investigating sand movement at shore, it is fundamental and important problem to examine the threshold movement for sand. The authors examined this problem and obtained the following results. The sand ripple is generated alternately by standing wave (see Fig. 1); that is, the sand ripple is formed at the node where horizontal velocity takes the maximum value, and not formed at the loop where horizontal velocity takes the minimum. Making use of the Airy Wave Theory, they calculated the horizontal velocity at the boundary point between the place where the ripple is generated and its near by place where it is not recognized. And they discussed on the threshold movement for sand at the laminar boundary layer. Consequently, the empirical formula was obtained,

\[ S_{dp} \tan \alpha = \frac{513 \ (u \phi / \nu) \cdot 1.85}{w} \]

where

\[ S = \left( \rho_s - \rho \right) \quad \delta = \sqrt{\nu T \over \pi} \]

\( d \): mean grain diameter of sand, \( \phi \): the acceleration of gravity, \( \rho_s \): density of sand grain, \( \rho \): density of fluid, \( T \): period of the wave, \( \nu \): kinematic viscosity, \( u \): the amplitude of horizontal velocity at the bottom, \( \alpha \): a static friction angle on the sand surface.

\[ S_{dp} \tan \alpha = \frac{513 \ (u \phi / \nu) \cdot 1.85}{w} \]

\[ S = \left( \rho_s - \rho \right), \quad \delta = \sqrt{\nu T \over \pi} \]

\( d \): 砂粒子の平均粒径, \( \phi \): 重力加速度, \( \rho_s \): 砂粒子の密度, \( \rho \): 液体の密度, \( T \): 波周期, \( u \): 底面における水平方向の流速の振幅, \( \alpha \): 砂粒子の安息角

1. 概要

砂粒子の移動限界に関する問題は、漂砂を取り扱う際や、貝類などの養殖を行なう際などに関連した、基礎的で重要な問題である。この砂粒子の移動限界の問題については、理論的考察、及び実験を通じて検討された。
Table 1. The coefficient for the threshold movement.

<table>
<thead>
<tr>
<th>Researcher</th>
<th>KURIHARA, SINOHARA, TUBAKI and YOSOKA</th>
<th>ISHIHARA and SAWARAGI</th>
<th>Sato and TANAKA</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>$n$</td>
<td>1/2</td>
<td>1/4</td>
<td>1/3</td>
</tr>
<tr>
<td>$\alpha$</td>
<td>1.56 - 2.44</td>
<td>0.171</td>
<td>0.565</td>
</tr>
<tr>
<td>The type of movement</td>
<td>initial movement</td>
<td>initial movement</td>
<td>general movement</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>complete movement</td>
</tr>
</tbody>
</table>

砂礫の形成される状態
(4) State of disappearing sand ripple

砂礫の消失する状態
以上、四つに分けられるが、それぞれの判断の基準に個人差があることは考慮しなければならないことである。著者らは、この区分の(3)，砂礫の形成される程度の砂粒子の移動について議論したのであるが、従来の方法とは異なり進行波によらず、定常波を用いて調べた。

2. 波による砂粒子の移動限界の理論的考察
波の作用下における底面の摩擦応力 $\tau$ は、

$$\tau = \tau_0 e^{\phi \alpha}$$ (2)

(2) 式を底面近の水平方向の流速 $u = u_0 e^{\phi \alpha}$ を用いると、

$$\tau = \rho u_0 u$$ (3)

すなわち、

$$\rho u_0 e^{\phi \alpha} = \rho f_0 u_0 e^{\phi \alpha}$$ (4)

ここに、$\tau_0$: 摩擦応力の振幅，$f_0$: 抵抗係数，である。式より、

$$f = \frac{\tau_0}{\rho u_0^2} \cdot e^{(\phi - \phi_0)}$$ (5)

抵抗係数の振幅 $f_0$ は、

$$f_0 = \frac{\tau_0}{\rho u_0^2}$$ (6)

波による砂粒子の移動を考えるとき、鉛直力及び粒径と波高の比が小さい場合には、水平方向の加速度が無視されることが示されている。このため，その移動開始時における力の平衡関係は，(6) 式を用いて次の様に表わすことができる。

$$(\rho - \rho) \frac{e^2}{6} - \frac{\rho}{4} \alpha \tan \frac{\rho}{4} \alpha$$ (7)

ここに，$k$: 砂の移動の程度によって決まる定数，$\alpha$: 砂粒子の不安定角，である。

(2)
一方，抵抗係数 \( f_{o} \) は，\( u_{o} \delta /v \) との関数であると考えられるので，次の様に書く。

\[ f_{o} = a(u_{o} \delta /v)^{p}(u_{o} \delta /v)^{q} \]  \hspace{1cm} (8)

\( a, p, q \): 定数

ここで，境界層が層流の場合，(8)式において \( p \leq q \) とすると考えられるから，(8)式は次の様になる。

\[ f_{o} = a(u_{o} \delta /v)^{p} \]  \hspace{1cm} (9)

(7)式と(9)式から，次のような関係が予測される。

\[ S_{d} g \tan \alpha /u_{o}^{3} = F(u_{o} \delta /v) \]  \hspace{1cm} (10)

この砂の移動限界に関する間数関係は，野田らにより認められている。ただし，(10)式は層流状態における関係式である。次に，この様に砂粒子の移動限界について考察するとき，その境界層が層流であるか，乱流であるかという問題になる。この問題に関しては，Liao and Manoharらにより研究され，次の結果を得ている。すなわち，底面が層流状態であるか，滑面状態であるかは，\( \delta /d \) によって決まり，

\( \delta /d > 6.54 \) ならば滑面状態

\( \delta /d < 4.02 \) ならば粗面状態

\( 4.02 < \delta /d < 6.54 \) ならば粗滑の遷移領域

これらの底面の状態に対して層流，乱流の境界条件が異なり，次の様になるとしている。

- 流速領域
  - \( u_{o} \delta /v > 566 \)
  - \( u_{o} \delta /v < 566 \)
- 遷移領域
  - \( u_{o} \delta /v > 104 \)
  - \( u_{o} \delta /v < 104 \)
- 粗面領域
  - \( u_{o} \delta /v > 1150 \)
  - \( u_{o} \delta /v < 1150 \)

一方，Kalkanisは，Li and Manoharの結果では遷移領域と粗面領域における層流，乱流の境界条件が異なるため，彼らの実験の不備によるものであるとの主張をなしている。特に，この問題に関する研究は，Vincent, Callins, Colebrook and Whiteらにより報告されているが，著者らは，Kalkanis の結果を使用して層流，乱流状態の決定を試みた。

3. 実験

Fig. 1 に示すような水槽を用いて，その底に約2〜3cm の厚さに砂を敷きつめ，その上に安定波を作る。波が作られると，底質に砂粒を生ずるが，この時生成する砂粒は進行波によって生じた砂粒の様に，底面に生じるのではなく，図の様に砂粒の生じている部分と，生じていない部分が交互にになっている。砂粒が生じている部分が安定波の範囲にあり，生じていない部分が複の一部にあたる。この様な砂粒の境界に注目し，その点の水平方向の流速の振幅 \( u_{o} \) を微小振幅波理論により求め，砂粒子の移動限界について以下のように考察した。

1. 水平方向の流速の振幅 \( u_{o} \)

微小振幅波理論によると安定波による水平方向の流速 \( u \) は次式で与えられ

\[ u = \frac{H_{o} k}{a} \frac{\cosh k(y+h)}{\cosh kh} \sin kx \cos at \]  \hspace{1cm} (11)

Fig. 1 における境界付近の水平方向の流速 \( u \) は，

\[ u = \frac{H_{o} k}{a} \frac{1}{\cosh kh} \sin \frac{W}{2} k \cos at \]  \hspace{1cm} (12)

ここに，

\[ a = \frac{2\pi}{T}, \quad k = \frac{2\pi}{L} \]

\( H_{o} \): 波高，\( L \): 波長，\( T \): 波の周期，\( h \): 水深，\( t \): 時間，\( x \): 水平方向にとった座標，\( y \): 鉛直下向きにとった座標，\( W \): Fig. 1 に示す距離である。

![Fig. 1. Schematic diagram of the experiment.](image)
After 1 min. Photo at oblique upper position.

After 5 min. Photo at oblique upper position.

After 5 min. Photo at upper position.

After 10 min. Photo at oblique upper position.

After 10 min. Photo at upper position.

Fig. 2. Growing process of the sand ripple.
定常波による砂堆生成と砂粒子の移動限界について

(12) 式より境界付近の流速の振幅 \( u_0 \) は、

\[
u_0 = \frac{Hgk}{\alpha} \frac{W}{2} \frac{k}{\cosh kh} (13)
\]

すなわち、W を測定することにより、(13) 式を用いて、境界付近の水平方向の流速の振幅 \( u_0 \) を計算することができる。

2. 砂堆と砂堆の間隔 \( W \) の測定

(13) 式より、W を測定すれば \( u_0 \) を求めることができるが、W を測定する場合によし、砂堆の成長が問題になる。すなわち、砂堆の成長により砂堆が前進し、その結果 W が次第に小さくなっていく。そこで、この W のある値を調べるために、砂堆の成長過程を調べた。

Fig. 2 の (1) から (5) が砂堆の成長してゆく様子である。(1) は波を当ててから約 1 分後の写真であり、斜め上方から撮影したものである。この状態は、発達初期の段階で、砂粒子の移動は見受けられるが、砂堆はまだほとんど形成されていない。従って、当然その境界も明確に決定できない。(2) と (3) は約 5 分後のものであり、それぞれ、斜め上方と真上方から撮影したものである。この程度になると、形は不規則なまではあるが、明らかに砂堆は生成しており、その境界も見分けられる。また、砂堆の部分に注目すると、堆積層に長く、斜め上方と真上方に撮影したものである。この程度になると砂堆は十分発達しており、砂堆の波長に規則性が見られ、また、堆積層が長く、発達していることもわかる。

この時の砂堆の波長は約 3.0 cm、波高は約 0.5 cm であった。砂堆が発達する時間は、当ててる波によってそれぞれ異なるが、その発達過程は、この様なものになると考えられる。次に、以上の様な砂堆の発達に伴って砂堆と砂堆の間隔 \( W \) がどのように変化してゆくかを示すために、\( W \) の時間変化をグラフに示した。(Fig. 3) このグラフと前述の砂堆の成長とを対応させて考察すると、砂堆が著しく前進を開始するの、砂堆の部分がほぼ平行になり始めた時点から考えられる。また、ある程度時間が経過すると、\( W \) が一定の値に近づくことから、砂堆もある程度前進すると、それ以上前進しなくなることがわかる。以上の様な簡単な考察から、砂粒子の移動限界を論ずる \( W \) の値として、砂堆が著しい前進を開始する前、つまり \( W \) がほぼ一定の値になった、この値を測定値とし、と言うのは、砂堆が前進するのは、前に作られた砂堆が大きく影響し、新たに砂堆が形成されると考えられるからである。

3. 実験方法及び装置

装置は Fig. 1 に示したものを使用した。水槽は、波長を変化させるために様々な A, B 2 種類の水槽を使用した。

A: 幅 38 cm、長さ 300 cm、深さ 45 cm
B: 幅 15 cm、長さ 130 cm、深さ 20 cm

底質に用いた砂粒子は、平均粒径 0.16 mm、比重 2.68 と、平均粒径 0.16 mm、比重 2.94 の 2 種類を用いた。この砂の粒度分布は、平均粒径 0.16 mm 付近に約 60 % が集中している。実験は、A の水槽で波長を 180 cm と 108 cm の 2 種、B の水槽では波長 130 cm を作り、それぞれについて水深、波高を変化させ、上述のように砂堆がある程度発達するまで波を当て、\( W \) を測定した。波高的測定には、容量型波高計を Fig. 1 に示す位置にセットして測定した。周期は、この実測値を用いた。測定結果と (13) 式より求めた \( u_0 \) の値を Table 2 に示す。

(5)
Table 2. Experimetal values.

<table>
<thead>
<tr>
<th>Wave height</th>
<th>Wave length</th>
<th>Depth</th>
<th>Period</th>
<th>$W$</th>
<th>$a_0$</th>
<th>Remarks</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>cm</td>
<td>cm</td>
<td>cm</td>
<td>sec</td>
<td>cm</td>
<td>cm/sec</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5.9</td>
<td>180</td>
<td>27.7</td>
<td>1.26</td>
<td>48.0</td>
<td>25.3</td>
<td>Water tank A</td>
</tr>
<tr>
<td>5.1</td>
<td>180</td>
<td>27.7</td>
<td>1.26</td>
<td>58.5</td>
<td>28.0</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7.7</td>
<td>108</td>
<td>27.7</td>
<td>0.87</td>
<td>29.0</td>
<td>22.0</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5.7</td>
<td>108</td>
<td>24.7</td>
<td>0.86</td>
<td>33.0</td>
<td>22.2</td>
<td>$\rho_s=2.94 \text{ g/cm}^3$</td>
</tr>
<tr>
<td>6.0</td>
<td>180</td>
<td>25.3</td>
<td>1.27</td>
<td>59.0</td>
<td>35.9</td>
<td>$d=0.16 \text{ mm}$</td>
</tr>
<tr>
<td>4.1</td>
<td>180</td>
<td>22.2</td>
<td>1.29</td>
<td>65.0</td>
<td>30.4</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4.1</td>
<td>108</td>
<td>22.2</td>
<td>0.87</td>
<td>32.0</td>
<td>17.8</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5.1</td>
<td>108</td>
<td>22.2</td>
<td>0.86</td>
<td>28.0</td>
<td>18.4</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4.2</td>
<td>108</td>
<td>20.2</td>
<td>0.90</td>
<td>30.0</td>
<td>19.1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4.9</td>
<td>130</td>
<td>12.0</td>
<td>1.22</td>
<td>35.0</td>
<td>36.7</td>
<td>Water tank B</td>
</tr>
<tr>
<td>4.4</td>
<td>130</td>
<td>11.5</td>
<td>1.25</td>
<td>36.0</td>
<td>25.2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4.1</td>
<td>130</td>
<td>10.8</td>
<td>1.26</td>
<td>34.0</td>
<td>42.4</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6.4</td>
<td>130</td>
<td>10.8</td>
<td>1.25</td>
<td>21.0</td>
<td>28.2</td>
<td>$\rho_s=2.68 \text{ g/cm}^3$</td>
</tr>
<tr>
<td>4.7</td>
<td>130</td>
<td>9.8</td>
<td>1.33</td>
<td>32.0</td>
<td>36.0</td>
<td>$d=0.16 \text{ mm}$</td>
</tr>
<tr>
<td>6.4</td>
<td>130</td>
<td>9.8</td>
<td>1.39</td>
<td>24.0</td>
<td>34.5</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4.3</td>
<td>130</td>
<td>8.5</td>
<td>1.36</td>
<td>28.0</td>
<td>29.8</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6.3</td>
<td>130</td>
<td>10.5</td>
<td>1.30</td>
<td>17.0</td>
<td>23.1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6.1</td>
<td>130</td>
<td>11.6</td>
<td>1.24</td>
<td>30.0</td>
<td>39.1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5.5</td>
<td>130</td>
<td>10.0</td>
<td>1.29</td>
<td>26.0</td>
<td>32.2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5.3</td>
<td>130</td>
<td>9.0</td>
<td>1.36</td>
<td>26.0</td>
<td>33.3</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5.4</td>
<td>130</td>
<td>11.0</td>
<td>1.25</td>
<td>23.5</td>
<td>26.7</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

4. 結果及び考察

実験によって得られたデータを整理する時に、前述のように測定の粗滑状態に応じた層流、乱流が問題になる。著者らが得た資料について、それらの状態について考察すると、次の様になった。

底面の粗滑の状態 $\delta/d>4.05$

底面の流れの状態 $u_{ed}/u<70.6$

なお、層面の状態を粗面である、層流状態にあると考えられる。次に、砂粒子の移動限界に関する (10) 式について調べてみた。（Fig. 4）参考のために図に、層面の砂粒子の全面発散限界に関する測定値を示した。

Fig. 4 から著者らが得た結果は、ほぼ直線関係にあるように思われる。しかしながら、層面、層面の資料と比較して、明らかに著者らの測定値が定数値だけ下方にずれている。この主な原因は前述したように、砂粒子の移動限界の程度が異なり、層面、層面は、全面発散については実験を行なったのに対し、著者らは、砂礫形成という点に重点をおき砂粒子の移動限界について測定したためである。

この実験値から最小二乗法により、回帰式を求めると次のようになる。

$$\log S_{dg} \tan \alpha/\mu^2 = -1.86 \log u_0/\nu + 2.71$$

$$S_{dg} \tan \alpha/\mu^2 = 513 (u_0^4/\nu)^{-1.88} \quad (14)$$

ただし、著者らが行なった実験においては、$\tan \alpha = 1$ とした。

（6）
実際に**field**においてどの程度の波によって砂が移動を開始するかを知るためには、(14)式と微小振幅波理論より波高、波長、水深を求めればよい。すなわち、微小振幅波理論によると、底面付近の水平方向の流速の振幅は次のようになる。

\[ u_0 = \frac{\pi H}{T \sinh 2\pi h/L} \]  

(15)

(14)式と(15)式より,

\[ \frac{\pi H}{T \sinh 2\pi h/L} = \left( \frac{\text{Sd} \tan \alpha}{513} \right) \left( \frac{\pi \nu}{T} \right)^{-0.89} \]  

(16)

(16)式を満足する波が限界の波である。

しかしながら、ここで行なった実験はごく限られた条件のもとでのものであり、この式が実際に**field**で適用できるかどうかは、更に検討が必要である。今後、このような定常波による砂礫についてより詳しく検討してゆきたいと考えている。

5. 結論

定常波によって作られた砂礫の境界において、砂の移動限界に関する式

\[ Sd \tan \alpha / u \delta / \nu \]

の関数関係が認められた。

謝辞

昭和48年度日仏海洋学会学術研究発表会において、佐々木俊義博士、並びに黒木敏郎博士に貴重な御教示と激励を承り、ここに深く感謝いたしております。また、研究に当たっては諸般の御協力を頂き、ここに感謝申し上げます。

文献

1) 栗原道徳、篠原達郎、柳本一郎、吉岡益男（1956）：波による海浜の砂移動、第3回海岸工学会講演集、p. 151。
2) 石原藤次郎、横木 久（1960）: 濃砂の移動限界流速、第7回海岸工学会講演集、p. 47。
3) 佐藤晴二、伊藤周男（1962）: 水平床における波による砂移動について、第9回海岸工学会講演集、p. 95。
4) 岡川清司、渡辺 昭（1966）: 波による砂移動に関する一考察、第13回海岸工学会講演集、p. 136。
6) 野田英明（1966）: 波による海岸砂の初期移動について、第13回海岸工学会講演集、p. 135。
A Geophysical Consideration of the Water in the Ushigomebori Moat

On the Seiche Motion of the Moat (II)*

Nobuo MORITANI** and Tomosaburo ABE**

Abstract: The Ushigomebori Moat is a basin appropriate to study of seiche motion because of its regular shape. The authors make a short quantitative discussion on observed seiches in the moat. On the assumption that the seiches are generated by the co-oscillation with the wind stress given by \( \tau_x \sin \frac{2\pi t}{T_1} \sin \frac{x}{L} \) and that they are subject to the uniform internal friction which is assumed to be \(-2\kappa h\), the calculated amplitude agrees well with the observation. The drag coefficient \( r_{so} \) is also calculated by using the amplitude of seiches. It is \( 2.3 \times 10^{-4} \) on the average.

1. Introduction

The present authors have carried out the observations on seiches almost every day since September 1, 1970 in the Ushigomebori Moat which is located in front of the buildings of Science University of Tokyo (Faculty of Science). The shape of the moat is roughly rectangular and the wind blows nearly parallel to the longitudinal direction throughout the year. In the moat the uni-nodal seiches are often observed. The authors have made a basic consideration on the seiches and made a phenomenal discussion about the relation between the amplitude of the uni-nodal seiches and the wind speed on the moat in an earlier paper (MORITANI and ABE, 1972). In the present paper, they intend to make a short quantitative consideration on the resonated seiches generated by the wind stress under a few reasonable assumptions.

2. Theory and procedure

If we regard the Ushigomebori Moat (Fig. 1) as a rectangular basin of length \( L \) and depth \( h \), the equation of motion is given by

\[
\frac{\partial \bar{u}}{\partial t} + 2k\bar{u} + g \frac{\partial \bar{\zeta}}{\partial x} = \tau_x \rho h,
\]

(1)

and the equation of continuity is given by

\[
\frac{\partial \bar{u}}{\partial x} + \frac{\partial \bar{\zeta}}{\partial t} = 0.
\]

(2)

In these equations \( g \) is the acceleration due to gravity, \( \rho \) is the uniform density of the water, \( k \) is the constant depth of the moat, \( \tau_x \) is the shearing stress of wind exerted on the water surface, \( 2k\bar{u} \) is the frictional force per unit mass, which is assumed to be proportional to the mean velocity of water \( \bar{u} \) and \( k \) indicates the frictional coefficient.

In the rectangular basin take the origin of the coordinates at one of its edges, the \( x \)-axis in the direction of the length, the \( z \)-axis and \( \zeta \) the surface elevation both positive upward, as is shown in Fig. 2.

Now we seek a solution of these equations in three cases: \( \tau_x = 0 \), \( \tau_x = \bar{\tau}_x(x) \) and \( \tau_x = \bar{\tau}_x(x, t) \).

1. Damping Seiches (in the case of \( \tau_x = 0 \))

* Received July 20, 1973

** Department of Physics, Science University of Tokyo
A Geophysical Consideration of the Water in the Ushigomebori Moat

Fig. 2. A cross section of the rectangular basin.

The seiches are generated by wind stress. The amplitude of the oscillation decreases by friction immediately after the wind blows over; that is, τ becomes zero. In this case, for the uni-nodal oscillation,

$$\zeta = \zeta_0 e^{-\alpha t},$$

where

$$\zeta_0 = H \cos \frac{\pi x}{L} \cos \left( \frac{2\pi t}{T_1} - \theta \right)$$

$$T_1 = \frac{2L}{\sqrt{gh}} \quad \text{and} \quad H = \frac{L \tau_0}{\rho gh T_1 K}$$

and H means the amplitude of seiches.

2. Wind set-up (in the case of $\tau = \tau(x)$)

When the wind blows steadily and parallel to the moat (that is $\tau_1 = \tau_1(x)$), seiches are not generated but wind set-up will take place. In this case, Equation (1) becomes $\frac{\partial S}{\partial x} = \frac{\tau(x)}{gh}$, that is, the generating force $\tau(x)$ entirely balances the hydrostatic pressure gradient. If the set-up $S$ is defined as the difference in elevation between the two edges of the moat, $S$ is written as

$$S = \frac{L}{\rho gh} \tau_1(x)$$

where

$$S = \zeta_0 - \zeta_L, \quad \tau_1(x) = \frac{1}{L} \int_0^L \tau(x) dx$$

and $\zeta_0$ and $\zeta_L$ means the surface elevation at $x=0$ and $x=L$, respectively. (see Fig. 2)

3. Resonated seiches (in the case of $\tau_1 = \tau_1(x, t)$)

When the wind stress is variable as $\tau_1 = \tau_0 \sin \frac{\pi x}{L}$, the resonated seiches will be occurred. And then, in the equilibrium state, the generating force will always balances the hydrostatic pressure gradient and the frictional force. In this case, for the uni-nodal oscillation,

$$\zeta = H \sin \left( \frac{2\pi t}{T_1} \pm \frac{\pi}{2} \right) \cos \frac{\pi x}{L},$$

where

$$T_1 = \frac{2L}{\sqrt{gh}} \quad \text{and} \quad H = \frac{L \tau_0}{\rho gh T_1 K}.$$ 

Hence,

$$\tau_1 = \frac{\rho g T_1 KH}{L} \sin \frac{2\pi t}{T_1} \sin \frac{\pi x}{L}.$$ 

3. Date analysis

The wind stress $\tau$ is obtained from the data of the wind speed. The drag coefficient $r^2$ and the amplitude of seiches $H$ are also calculated from the data of the wind speed.

Now taking a wind speed record over a proper time interval $T$ seconds and reading it every $T/2n$ seconds as shown in Fig. 3, we carry out harmonic analysis of the time series thus obtained. Let $T$ be equal to $mT_1$, where $m=1, 2, 3, \ldots$ and $T_1$ is the period of uni-nodal seiches in the moat. Since there is a bank around the moat which is about 10 m in height, it seems that the wind speed almost vanished at the edges of the moat and takes maximum value in the middle part of it. Therefore, we may assume the horizontal distribution of the wind speed is of the form $W(i) \sin \frac{\pi x}{L}$ to get the wind speed as follows:

$$W_1 = \sum_{i=0}^{n-1} W_i \sin \left( \frac{2\pi it}{T} + \epsilon_i \right) \sin \frac{\pi x}{L}$$

in the case of $i=0$,

$$W_1 \sin \left( \frac{2\pi it}{T} + \epsilon_i \right) \sin \frac{\pi x}{L} = W_0 \sin \frac{\pi x}{L}.$$
Now let us suppose that the wind stress exerted on water surface is proportional to the square of the wind speed, so that \( \tau_s = \rho_a \omega^2 W_s^2 \), where \( \rho_a \) means the density of air and \( W_s \) means the wind speed at the 10 m level. Then from Equation (7) the wind stress will be

\[
\tau_s = \rho a T_1 2^{n-1} \left( \sum_{i=0}^{n-1} W_i \sin \left( \frac{2\pi i}{T_1} + \epsilon_i \right) \sin \frac{\pi x}{L} \right)^2.
\]

From Equation (6), the resonated seiches are induced by the variable wind stress \( \tau \), so \( \tau \propto \sin \frac{2\pi x}{T} \), whose wave length is \( 2L \) and the period is \( T \). Therefore, these components of the wind stress in Equation (8) are considered to mainly generate the univ-nodal resonated seiches. Now, by Fourier's theorem Equation (8) may be represented as a sum of a number of harmonic constituents.

\[
\tau_s = \sum_{i=1}^{n} \sum_{k=1}^{n'} \tau_{i,k} \sin \left( \frac{2\pi i t}{T_1} + \theta_i \right) \sin \left( \frac{\pi k x}{L} + \theta_k \right),
\]

where \( \tau_{i,k} \) are constants. Only \( \tau_{0,1} \) is required, for the harmonic constituent of the wave period \( T_1 = mT \) and length \( 2L \). To get \( \tau_{0,1} \), multiply \( \tau_s \) by \( \sin \frac{2\pi x}{T} \) and integrate from \( t = 0 \) to \( t = T \) and from \( x = 0 \) to \( x = 2L \). It follows that

\[
\tau_{0,1} = \frac{8}{3\pi} \rho a T_1 10^{\frac{1}{2}} 2 W_0 W_m \cos \epsilon_m + \frac{8}{3\pi} W_m^2 \cos \epsilon_m + \frac{1}{2} W_m W_{2m} \sin (\epsilon_m - \epsilon_{2m}) \sin \frac{2\pi t}{T_1} \sin \frac{\pi x}{L}.
\]

In the case of \( \epsilon_m = 0 \) and \( W_{2m} \ll W_0 + W_m \),

\[
\tau_{0,1} = \frac{8}{3\pi} \rho a \omega^2 W_m \sin \frac{2\pi t}{T_1} \sin \frac{\pi x}{L},
\]

where \( W^2 = 2W_0 W_m + \frac{8}{3\pi} W_m^2 \).

Then from Equations (6) and (9),

\[
\omega^2 = \frac{\rho g T_1 k H}{\rho_a LW_0^2 F(\alpha)}
\]

or

\[
H = \frac{\rho g LW_0^2 T_1 k F(\alpha)}{\rho g T_1 k}
\]

where \( F(\alpha) = \alpha(2+\alpha) \) and \( \alpha = \frac{8}{3\pi} \frac{W_m}{W_0} \).

4. Results and discussions

1. Wind speed

As the moat is surrounded by a bank which is about 10 m in height, it seems that the wind blows nearly parallel to the longitudinal direction of the moat through the year (see the Wind Rose in the above cited report, 1972). The wind speed was observed by a Three-Cup Robinson Type anemometer at a level of about one meter at Station P (see Fig. 1) which is near the center of the moat. The monthly average of the wind speed is drawn by a thick line in Fig. 4. Also the monthly average of wind speed at the Meteorological Agency at the 52.2 m level is shown by a light line. The Meteorological Agency is located about 3 km east of the moat. Now we assume that the wind profile near the ground is indicated as (Kondo (ed.), 1964)

\[
\frac{W_s}{W_0} = \left( \frac{z}{z_0} \right)^{0.24},
\]

where \( z \) means the height from the ground, \( z_0 = 10 \text{ m} \), \( W_s \), and \( W_0 \) are the speeds at 10 m and \( z \) m levels, respectively. Then the relationship between the wind speed at a 10 m level on the moat and that at a 52.2 m level at the Meteorological Agency was estimated by extrapolating the slope of the wind profiles from

![Fig. 4. Monthly average of the wind speed at the Meteorological Agency and on the Ushigomebori Moat](image-url)
A Geophysical Consideration of the Water in the Ushigomebori Moat

Table 1. Comparison the observational period $T_{obs.}$ with the calculated period $T_{cal.}$

<table>
<thead>
<tr>
<th>Date</th>
<th>Interval of obs.</th>
<th>Mean depth (m)</th>
<th>$T_{obs.}$ (sec)</th>
<th>$T_{cal.}$ (sec)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Jan. 31, '71</td>
<td>09:01~14:31</td>
<td>1.04</td>
<td>406.6</td>
<td>39.41</td>
</tr>
<tr>
<td>Feb. 9, '71</td>
<td>13:21~18:12</td>
<td>1.01</td>
<td>406.0</td>
<td>396.0</td>
</tr>
<tr>
<td>Apr. 21, '71</td>
<td>08:49~11:11</td>
<td>1.02</td>
<td>405.7</td>
<td>394.1</td>
</tr>
<tr>
<td>May 22, '71</td>
<td>07:55~14:04</td>
<td>1.02</td>
<td>402.5</td>
<td>394.1</td>
</tr>
<tr>
<td>Jun. 4, '71</td>
<td>15:15~21:20</td>
<td>1.02</td>
<td>405.5</td>
<td>394.1</td>
</tr>
<tr>
<td>Jul. 7, '71</td>
<td>12:00~15:45</td>
<td>1.05</td>
<td>397.1</td>
<td>388.4</td>
</tr>
<tr>
<td>Mean values</td>
<td></td>
<td>1.02</td>
<td>403.9</td>
<td>393.5</td>
</tr>
</tbody>
</table>

10 m to 52.2 m. The extrapolated value is also shown by a broken line.

The extrapolated values of the wind speed is 1.56 times as large as that of the wind speed observed on the average. Therefore, we assume the wind speed at the 10 m level on the moat can be obtained with multiplying the wind speed observed at the one meter level by 1.56.

2. Period of seiches

The observations on seiches in the moat have been made since September 1, 1970, at Station Q with float type level meter (see Fig. 1). The station is located by the edge of the moat. In the moat the predominant uni-nodal seiches are frequently observed. The observed period of the seiches becomes $T_{obs.} = 403.9$ sec as shown in Table 1. The calculated period by the formula $T_{cal.} = 2 \sum_{i=0}^{n} \frac{\Delta x_i}{gh_i}$ (where $\Delta x_i = x_{i+1} - x_i$ and $h_i$ is the mean depth at $x_i$) is 393.5 sec, which is in good agreement with the observed period. For the sake of simplicity of calculation, the period of the uni-nodal seiches in the moat is taken as $T_1 = 400$ sec.

3. Damped seiches

Fig. 5 shows the record of a damping seiche which was obtained during a heavy thunderstorm. The amplitude of the seiches decreases nearly exponentially because of the rapid decreasing of the wind speed. In this case, $k$ becomes $9.3 \times 10^{-4}$ from Equation (3).

Fig. 6 is a record obtained for a light wind. In this case, $k$ is $9.2 \times 10^{-4}$ sec$^{-1}$. Therefore, for the average value of these two cases $k$ becomes $9.2 \times 10^{-4}$ sec$^{-1}$. The frictional coefficient in Lake Ashinoko (about 6 km in length and 25 m in mean depth) was $1.9 \times 10^{-5}$ sec$^{-1}$, after SUZUKI (1935). The value in the moat is remarkably large compared with that in Lake Ashinoko. This seems to be caused mainly by the shallowness of the Ushigomebori Moat relative to its length.

4. Wind set-up

When the wind stress exerted on the water surface has a form

$$
\tau_s(x) = \rho gh \frac{T_1 k}{L} H \sin \frac{\pi x}{L},
$$

(12)
Equation (4) gives the wind set-up

\[ S = \frac{2HTk}{\pi}. \]

From Equations (5), (6) and (12), we have

\[ 2H = \frac{\pi}{T_1 k}. \]

The double-amplitude of seiches \( 2H \) becomes \( \frac{\pi}{T_1 k} \) times a large as the set-up \( S \). In the case of the moat, we have \( T_1 = 400 \text{ sec} \) (c.f. Table 2) and \( k = 9.2 \times 10^{-4} \text{ sec}^{-1} \), so that \( 2H \) becomes 8.6 \( S \). Hence the observation of the amplitude of seiches seems easier than that of the wind set-up in lakes or bays.

5. Resonated seiches

We assume that the seiches are generated by co-oscillation with the wind stress. According to Equation (11), the amplitude of seiches becomes

\[ H = \frac{\rho \omega W L^2 \alpha^2 F(\alpha)}{\rho g T_1 k}, \]

where \( F(\alpha) = \alpha (\pi + \alpha) \) and \( \alpha = \frac{8 \ W_0}{3 \omega \ W_0} \).

We put \( \rho = 1.20 \times 10^{-3} \text{ g/cm}^3 \), \( \rho = 1.00 \text{ g/cm}^3 \), \( k = 1.00 \times 10^6 \text{ cm} \), \( L = 6.12 \times 10^4 \text{ cm} \), \( T_1 = 400 \text{ sec} \), \( k = 9.2 \times 10^{-4} \text{ sec}^{-1} \), \( r_1 = 2.0 \times 10^{-8} \). The wind speed observed at the one meter level is used to get that at the 10 m level as mentioned before. Now we take a time length \( T = 1200 \text{ sec} \) and \( 2n = 20 \). Since \( T_1 \) is 400 sec, \( m \) becomes 3 in Equation (9). We assume that the wind blows parallel to the moat and its direction is not changed in time. Since an error is inevitably introduced in the reading of the \( W_0 \) constituent (whose period is 200 sec), this constituent is not taken into account in the following calculations. That is, the wind stress which generates the resonated seiches is given by Equation (9).

6. The amplitude of seiches versus wind speed

Fig. 7 shows a result of the harmonic analysis of the wind speed when the uni-nodal seiche motion was prevailed as well as data of the seiches. The notation \( W_0 \) means the average wind speed, \( W_\alpha \) means the oscillation with a period of 400 sec and \( H \) means the amplitude of seiches obtained from Equation (11). The amplitude in the time interval 16:10 ~16:30, June 4, 1971 becomes fairly smaller than the calculated value \( H \). This may be explained as follows; these seiches may be generated before that time and they keep relatively large amplitude in those time interval.
without full damping effect. Since the seiches in the time interval 16:00～16:20, July 16, 1971 was generated during a heavy thunderstorm, as mentioned before, it may be expected that a front line had passed over the moat, which could give rise to the reversal of the wind direction and to the atmospheric pressure difference at the both edges of the moat in those time interval. Hence the theoretical values are considered in fair agreement with the observed results, except in the above-mentioned cases. In the moat, consequently, the seiches seems to be mainly generated by the c-c-collision with the wind stress.

The relation between the amplitude of seiches and the mean wind speed over 30 min is shown in Fig. 8. The double-amplitude $2H$ is plotted against the mean wind speed with the signs $\circ$ and $\bullet$, respectively. The solid lines indicate the theoretical curves based Equation (11). As shown in these theoretical curves, the values of $2H$ are very small for a light wind and much larger for higher wind speeds. Now on paying attention to the intersections of the theoretical and broken lines, a characteristic of the wind over the moat may be seen as follows: The $W_3$ constituent, the period of which is equal to that of seiches in the moat, is nearly the same value for a light wind and the ratio $W_3/W_0$ becomes much smaller with higher wind speeds. The wind in general seems to fluctuate to a great extent about its mean values for a light wind, while the fluctuation seems to be smaller for higher wind speeds. When the wind blows parallel to the moat and does not change its direction, the ratio of $W_3/W_0$ is generally smaller than the unity. Hence in Fig. 8, the data of the amplitude of seiches, shown by sign $\bullet$, seem to be caused by disturbances such as the change of the wind direction, the pressure difference at the both edges of the moat and some others. The authors like to study on these kind of seiches in future.

![Figure 8](image)

**Fig. 8.** The amplitude of seiches versus wind speed.

<table>
<thead>
<tr>
<th>Date</th>
<th>Interval of obs.</th>
<th>$W_0$ (m/sec)</th>
<th>$W_3$ (m/sec)</th>
<th>$2H_{obs.}$ (cm)</th>
<th>$r^2$</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Dec. 2, '70</td>
<td>14:20～14:40</td>
<td>4.18</td>
<td>0.89</td>
<td>0.45</td>
<td>0.0017</td>
</tr>
<tr>
<td>Jan. 22, '71</td>
<td>15:20～15:40</td>
<td>3.65</td>
<td>1.09</td>
<td>0.59</td>
<td>0.0019</td>
</tr>
<tr>
<td>Jan. 23, '71</td>
<td>12:20～12:40</td>
<td>5.07</td>
<td>0.99</td>
<td>0.78</td>
<td>0.0020</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>12:40～13:00</td>
<td>5.68</td>
<td>0.73</td>
<td>0.90</td>
<td>0.0052</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>13:00～13:20</td>
<td>6.43</td>
<td>1.05</td>
<td>0.90</td>
<td>0.9015</td>
</tr>
<tr>
<td>Jan. 29, '71</td>
<td>13:00～13:20</td>
<td>3.92</td>
<td>0.98</td>
<td>0.38</td>
<td>0.0014</td>
</tr>
<tr>
<td>Jan. 31, '71</td>
<td>11:30～11:50</td>
<td>3.00</td>
<td>0.97</td>
<td>0.55</td>
<td>0.0023</td>
</tr>
<tr>
<td>Feb. 6, '71</td>
<td>16:45～17:05</td>
<td>4.39</td>
<td>0.56</td>
<td>0.41</td>
<td>0.0028</td>
</tr>
<tr>
<td>Jun. 4, '71</td>
<td>15:30～15:50</td>
<td>7.49</td>
<td>1.75</td>
<td>1.62</td>
<td>0.0016</td>
</tr>
<tr>
<td>Jul. 16, '71</td>
<td>16:20～16:40</td>
<td>5.48</td>
<td>1.28</td>
<td>1.09</td>
<td>0.0022</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Mean</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>0.0023</td>
</tr>
</tbody>
</table>

Table 2. The observational data of $W_0$, $W_3$, $2H_{obs.}$ and the calculated values $r^2$. In the table $W_0$ and $W_3$ means the wind speed at the level 10 m.
Table 3. The calculated values of $k$ and $\nu$ in Ushigomebori Moat.

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>Frictional coeff. $k$ (sec$^{-1}$)</th>
<th>Kinematic viscosity $\nu$ (c.g.s.)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Ushigomebori Moat</td>
<td>$9.2 \times 10^{-4}$</td>
<td>$3.5 \times 10^5$</td>
</tr>
<tr>
<td>Lake Ashinoko</td>
<td>$1.9 \times 10^{-5}$</td>
<td>$\sim 10^5$</td>
</tr>
</tbody>
</table>

7. Drag coefficient

The theoretical values $r_{10}^2$ is obtained from Equation (10), as

$$r_{10}^2 = \frac{\rho gh T_k k H}{\rho_s L W_0 F(\alpha)}$$

where $F(\alpha) = \alpha(2 + \alpha)$ and $\alpha = \frac{8}{3} \frac{W_0}{W_s}$.

The observed data $W_0$, $W_s$, $2H_{bas}$, and the values $r_{10}^2$ calculated from Equation (10) are shown in Table 2. A detailed discussion on $r_{10}^2$ is out of the scope, as mentioned before. However, the mean value of the $r_{10}^2 = 2.28 \times 10^{-3}$ is in good agreement with the values $r_{10}^2 = (1.5 \pm 0.8) \times 10^{-3}$ which is often used for lower wind speeds.

8. Kinematic viscosity

Now we assume the damping of the seiches is entirely caused by the kinematic viscosity instead of the above-mentioned friction and calculate coefficient of the kinematic viscosity $\nu$ by means of the same method as that used by SUZUKI (1936) for Lake Ashinoko. Table 3 compares the kinematic viscosity in the moat with that in Lake Ashinoko. The kinematic viscosity is calculated in the following two cases; one is for the free-slip bottom ($z_s = 0$) and the other is for the non-slip bottom ($u_b = 0$). The value becomes $3.5 \times 10^5$ c.g.s. in the former case and $4.6$ c.g.s. in the latter case. The kinematic viscosity which is obtained from data on the ocean current might be between 1 c.g.s. and $10^6$ c.g.s. Hence the damping in the Ushigomebori Moat may be explained more reasonably by the non-slip bottom condition.

The amplitude of the resonated seiches including the effect of the kinematic viscosity is calculated according to HIDAKA (1935) as follows; when the water does not slip at the bottom, it becomes

$$\zeta^* = \frac{L_0}{\pi \rho gh} \sqrt{2} q \left[ \cosh q - \cos \frac{q}{2\pi T_1} \sin \frac{2\pi T_1}{T_1} \right]$$

where $T_1 = \frac{2L}{\sqrt{gh}}$.

In our case $h = 1.0 \times 10^2$ cm, $T_1 = 400$ sec and $\nu = 4.6$ c.g.s., so that $q$ is equal to 4.1. Therefore, the maximum amplitude will be

$$\zeta^* = \frac{L_0}{\pi \rho gh} \times 6.0.$$ 

On the other hand, from Equation (6), the amplitude of the variable wind stress $\tau_0$ becomes

$$\tau_0 = \rho g T_k H / L.$$ 

Hence,

$$H = \frac{L_0}{T_k \rho gh} \cdot \frac{\pi}{T_1 k}.$$ 

Substitution of Equations (14) and (15) into (13) gives

$$\zeta^*_{Max} = 0.70 \zeta_{Max}.$$ 

Consequently, the theoretical values of the amplitude of the resonated seiches with effect of the kinematic viscosity are in fair agreement with that obtained with the assumption that the friction is proportional to the velocity.

5. Conclusion

The Ushigomebori Moat is located in front of Science University of Tokyo (Faculty of Science). The moat is considered to be a model basin suitable for making researches in seiche motion because of its geometry. Then the observations of seiches in the moat have been carried out almost every day since September
1970. The authors have made a short quantitative discussion on the seiches from the obtained data. It is as follows:

(1) If the damping of the amplitude of seiches is assumed to be mainly caused by the effect of the internal friction, proportional to the mean velocity of the water particle, the frictional coefficient \( k \) is given by \( 9.2 \times 10^{-4} \text{sec}^{-1} \) on the average.

(2) If the seiches are generated by the co-oscillation with the wind stress in the form of \( \tau = \tau_0 \sin \frac{2\pi t}{T} - \frac{\tau_0 x}{L} \), and subject to the above-mentioned friction, the calculated amplitude of seiches agrees well with the observation.

(3) The drag coefficient \( \tau_{10} \) is also calculated from the amplitude of seiches. It is \( 2.3 \times 10^{-3} \) on the average.

(4) On assuming that the damping is entirely caused by the kinematic viscosity, the coefficient of the kinematic viscosity is calculated for the non-slip and free-slip bottom. The coefficient of the kinematic viscosity becomes \( 3.5 \times 10^6 \) c.g.s. in the former case, \( 4.6 \) c.g.s. in the latter case.

(5) The theoretical values of the amplitude of the resonated seiches with the effect of the kinematic viscosity are in fair agreement with that with the effect of the internal friction.

Consequently, the moat may be regarded as an appropriate basin for making a study of seiches from the view point of the momentum transportation from air to water. The authors will carry out more accurate observations, with emphasis on the wind profiles, to have some insight into the mechanism of the air-water interaction.

Acknowledgments

The present authors wish to express sincere thanks to Mr. N. FUKUCHI (Research assistant of their Laboratory) for his variable advice and also to Mr. K. TAI (Ocean Research Institute, University of Tokyo), Mr. H. NAGASHIMA (The Institute of Physical and Chemical Research) and members of "The Basic Research On Wind Waves (Haró Kenkyu-Kai)". Thanks are due to Mr. N. FUKUDA, Mr. A. YANAI (Graduate student-Doctor Course), Mr. M. ARAI (Graduate student-Master Course) and the all students in the laboratory for their help of this study. Thanks are also due to Mrs. K. FURUKAWA for her help of the observations.

References


(15)
本学前濠水の地球物理学的考察
——牛込濠の静波について（第2報）——
森谷誠生 阿部友三郎

要旨：牛込濠はその源が有する特質上，静振運動を考究するには格好のModel水槽と考えられる。
昭和45年10月から翌年9月まで一年間に観測された静波に関する記録をもとに若干の定量的考察を行った。
かなり理想的に減衰していると見られる静波の記録から得られた摩擦係数（κ）は9.2×10^{-4} sec^{-1}，
また流動粘性係数（η）は水が底で滑るとき3.5×10^9 c.g.s.，滑らないとするとき4.6 c.g.s.となった。
当濠に発達する静波は、風との共振により生じたとすると，その実測値の振幅をかなりよく説明できた。また，この静波の振幅，風速，減衰率等の観測値から計算された抵抗係数 τ^2_{10} の値は
平均で2.3×10^{-3}となり，通常強風時によく使用される τ^2≈(1.5±0.8)×10^{-4} の値と良く一致した。
Effects of Slag on Aquatic Life*

Yunosuke ITAKA**, Ryohei TSUDA**, Tsutomu MORINAGA**
and Hidemi KUMAI***

Abstract: In order to obtain some knowledges of slag influence on aquatic life, a series of experiments was made. First, the-aquatic-life adhesion to or gathering around the iron slag dropped in the sea were observed. Further, fish breeding was made in the containers either with or without slags. Finally, the growth rate of zooplankton, rotifer, and the survival rate of fish eggs and larvae were studied. The results showed minor effects on the aquatic life. The aquatic organisms adhered or gathered around slags immediately after dropped in the sea (Table 3 and Figs. 1 and 2). The growth rate of fish in containers containing slags was better than that of without (Figs. 3 and 4). The results obtained for a rotifer and fish egg or larva were not clear.

1. Introduction
Recently, slag is introduced extensively to utilize as the constructional materials for dikes and coast. It is, therefore, very important to know the effects of slag on aquatic life. It is well-known that slag is effective for fertilization of farms. Nevertheless there is no report describing the influence of slag on aquatic life. The authors thus intend to discuss this problem in the present paper.

The present study was supported by a research fund from the Japan Slag Association, Osaka, Japan.

2. Slag used
The slag used was the iron slag offered by Wakayama Slag Industry Co. Ltd., which was classified into four sized-groups as shown in Table 1.

<table>
<thead>
<tr>
<th>Sized-group</th>
<th>I</th>
<th>II</th>
<th>III</th>
<th>X</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Size (Diameter in mm)</td>
<td>0-5</td>
<td>5-25</td>
<td>25-40</td>
<td>150-300</td>
</tr>
<tr>
<td>Specific gravity</td>
<td>2.58</td>
<td>2.57</td>
<td>2.57</td>
<td>2.47</td>
</tr>
</tbody>
</table>

| Table 1. Various sized-groups of slag used. |

And, its chemical components are illustrated in Table 2.

<table>
<thead>
<tr>
<th>Slag used</th>
<th>S\textsubscript{2}O\textsubscript{3}</th>
<th>Al\textsubscript{2}O\textsubscript{3}</th>
<th>CaO</th>
<th>FeO</th>
<th>M\textsubscript{2}O</th>
<th>S</th>
<th>M\textsubscript{2}O</th>
<th>TiO\textsubscript{2}</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Data: from Wakayama Slag Industry Co. Ltd.</td>
<td>33.5</td>
<td>14.5</td>
<td>41.5</td>
<td>0.4</td>
<td>5.1</td>
<td>0.9</td>
<td>0.9</td>
<td>1.6</td>
</tr>
</tbody>
</table>

| Table 2. Chemical components of slag used. |

3. Adhesion and gathering of aquatic life on slag in sea
This experiment was made in the bay of Uragami, Wakayama. Several cubic steel meshed baskets, which contained some volumes of slag of sized-group X, were dropped at the 1.0, 3.0 and 5.0 m depth layers in the bay, on June 23, 1971, respectively. For comparison, similar baskets containing some stone or brick were also set at the corresponding layers. The dimension of a basket was 35 by 50 by 40 cm length. After dropping, the appearance of

* Received August 10, 1973
** Department of Fisheries, Kinki University
*** Uragami Fisheries Experimental Station, Kinki University

(17)
Table 3. Species found in- and outside of baskets contained slags.

<table>
<thead>
<tr>
<th>On the 48th day</th>
<th>On the 128th day</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Japanese parrot fish, <em>Oplegnathus fasciatus</em></td>
<td>Japanese parrot fish, <em>Oplegnathus fasciatus</em></td>
</tr>
<tr>
<td>Slimy, <em>Leiognathus muchalis</em></td>
<td>Rudderfish, <em>Girella punctata</em></td>
</tr>
<tr>
<td>Footballer, <em>Macrocanthus strigatus</em></td>
<td>Filefish, <em>Stephanolepis cirrhifer</em></td>
</tr>
<tr>
<td>Scraper, <em>Navodon modestus</em></td>
<td>Coralfish, <em>Abudelfaf vaugtiensis</em></td>
</tr>
<tr>
<td>Boxfish, <em>Ostracion tuberculatus</em></td>
<td>Footballer, <em>Macrocanthus strigatus</em></td>
</tr>
<tr>
<td>Three-line grunt, <em>Parapristipoma trilineatum</em></td>
<td>Lembus rudderfish, <em>Kyphosus lembus</em></td>
</tr>
<tr>
<td>Filefish, <em>Stephanolepis cirrhifer</em></td>
<td>Small crab</td>
</tr>
<tr>
<td>Sea lettuce</td>
<td>Small shrimp</td>
</tr>
<tr>
<td>Acorn shell</td>
<td>Sea lettuce</td>
</tr>
<tr>
<td>etc.</td>
<td>Sea squirt</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Acorn shell</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>etc.</td>
</tr>
</tbody>
</table>

adhesion or gathering of aquatic life on slag, stone or brick was observed and recorded by human eyes and camera using an aqualung.

According to the divers, the aquatic life adhered to and gathered around slags immediately after dropping, and rather rapidly than stones or bricks. Table 3 shows the list of fish species found inside and outside of baskets contained slags on the 48th and 128th days.

Fig. 1 is the appearance of slags dropped at 3.0 m depth layer for 128 days. Fig. 2 is the species collected in one of the baskets contained slags, left on the 306th day after dropping.

![Fig. 1. Appearance of slags on the 128th day after dropping at 3.0 m depth layer.]

![Fig. 2. Fish collected in one of the baskets with slags, on the 306th day after dropping.](image)
4. Fish breeding in containers contained slags

This experiment was made in laboratory from August 4 to November 24, 1971. Prior to the experiment, four containers of 60 by 30 by 40 cm in length were prepared. Some slags of sized-group I, II and III, of which the weights of 5 kg each, were paved on the bottoms of the three containers, respectively. At the bottom of the last container, for comparison purpose, some pebbles of the same weight, 5 kg was placed. The fresh water of 60 l with ten fish of rose bitterling, *Rhodeus ocellatus ocellatus* was introduced into each vessel. The breeding conditions were the same at all containers. The water temperature was controlled as that of the room temperature, 17 to 25°C. The air of 750 ml per minute was circulated into each container. The pH values were not different in all containers and maintained within 8.5 to 7.2. "Itomimizu-s", *Tubifex hattai* of 500 mg in weight per day were given into each container as food. During the experiment, the mortality of fish of each container was zero. The results are shown in Figs. 3 and 4. Fig. 3 shows the change in the mean total length of fish of each container during the experiment. Fig. 4 indicates the change in the mean body weight of fish by each vessel.

From the above results, it is evident that the growth rate of fish kept in the containers contained slags was better than pebbles. There was insignificant difference in sized-groups of slag, except for the sized-group of III in body weight changing.

5. Culture of zooplankton, rotifer, in containers contained slags

The rotifer, *Brachionus plicatilis* was chosen in this experiment and its culture was conducted by using marine chlorella as food. At first, on the bottoms of five containers prepared, slags of sized-group II of 100, 300, 700, 1,500 and 3,000 g weight were paved, respectively. Next, the chlorella, density of 17,000 cells per ml and the rotifer, density of one individual per ml were introduced together into each container with 30 l water. For comparison, one container without slag was also prepared, with the same density of chlorella and rotifer as mentioned above. The densities of chlorella and rotifer in each vessel were checked at a specific time. After stirring the culture container vigorously, ten samples were pipetted with minimal from the culture container and then the averages of chlorella cells and rotifer individuals per one ml were checked. During
the experiment, the air of 1,500 ml per minute was continuously circulated into each container. The temperature and pH value of water in each vessel were also observed at the same time. The results are given in Figs. 5, 6a and 6b. Fig. 5 shows the changes in temperature and pH value at a definite time of each container. Fig. 6a and Fig. 6b indicate the changes in the densities of chlorella and rotifer in each container.

Fig. 5 shows that the temperature and pH value lied within 27 to 23°C and 10.5 to 7.5 in all vessels. There was no statistical significant. From Figs. 6a and 6b the number of rotifer density increased during the first 8 days and gradually decreased due to the insufficient supply of chlorella. As far as the effect of slag concerned, it can be said that the growth rate of rotifer is depending upon the amount of slag. The great amount of slag retards the growth rate and in vice versa.

6. Survival of fish eggs and larvae in containers contained slags

In this experiment, the normal fertilized eggs of Japanese parrot fish, Oplegnathus fasciatus were used. Two 500 l containers, one containing slag of 2 kg, were prepared. In this experiment, slag was suspended in water. The normal fertilized eggs of 10,000 were introduced into containers obviously, without feeding. The aeration of 510 ml per minute was continuously pumped into each container. The water temperature and pH value in each vessel were between 21 to 25°C and 8.6 to 8.2 throughout the experiment. The eggs introduced were hatched out from 30 to 40 hours. The number of terminated eggs and larva, thus was counted

(20)
Effects of Slag on Aquatic Life

Table 4. Numbers of terminated eggs and larvae, and measurements of total length (TL) and body depth (BD) of alive larvae.

<table>
<thead>
<tr>
<th>Day</th>
<th>Temp. C°</th>
<th>pH</th>
<th>Numbers of term. eggs and larva</th>
<th>Larval size, mm</th>
<th>Temp. C°</th>
<th>pH</th>
<th>Numbers of term. eggs and larva</th>
<th>Larval size, mm</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>TL</td>
<td>BD</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>21.4</td>
<td>8.55</td>
<td>913</td>
<td></td>
<td></td>
<td>21.6</td>
<td>8.55</td>
<td>1227</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>22.1</td>
<td>8.40</td>
<td>97</td>
<td>1010</td>
<td>2.08</td>
<td>0.74</td>
<td>22.0</td>
<td>8.40</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>22.3</td>
<td></td>
<td>18</td>
<td>1028</td>
<td></td>
<td>22.3</td>
<td></td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>22.4</td>
<td></td>
<td>12</td>
<td>1040</td>
<td></td>
<td>22.4</td>
<td></td>
<td>13</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>22.0</td>
<td>8.41</td>
<td>11</td>
<td>1051</td>
<td></td>
<td>22.1</td>
<td>8.41</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>21.8</td>
<td></td>
<td>44</td>
<td>1065</td>
<td>3.11</td>
<td>21.8</td>
<td></td>
<td>25</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>21.5</td>
<td>8.41</td>
<td>51</td>
<td>1146</td>
<td></td>
<td>21.5</td>
<td>8.41</td>
<td>57</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>21.9</td>
<td></td>
<td>914</td>
<td>2060</td>
<td></td>
<td>21.9</td>
<td></td>
<td>1307</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>22.2</td>
<td></td>
<td>823</td>
<td>2883</td>
<td></td>
<td>22.2</td>
<td></td>
<td>1722</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>22.1</td>
<td>8.39</td>
<td>730</td>
<td>3603</td>
<td></td>
<td>22.1</td>
<td>8.39</td>
<td>1263</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>21.9</td>
<td></td>
<td>661</td>
<td>4264</td>
<td>3.56</td>
<td>0.79</td>
<td>22.0</td>
<td>590</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>22.4</td>
<td></td>
<td>449</td>
<td>4713</td>
<td></td>
<td>22.4</td>
<td></td>
<td>243</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>21.7</td>
<td>8.30</td>
<td>97</td>
<td>4810</td>
<td>4.33</td>
<td>0.82</td>
<td>21.8</td>
<td>8.32</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>20.9</td>
<td></td>
<td>87</td>
<td>4897</td>
<td></td>
<td>20.9</td>
<td></td>
<td>86</td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>20.8</td>
<td>8.40</td>
<td>122</td>
<td>5919</td>
<td>4.24</td>
<td>0.90</td>
<td>20.8</td>
<td>8.39</td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>21.4</td>
<td></td>
<td>105</td>
<td>5124</td>
<td></td>
<td>21.5</td>
<td></td>
<td>164</td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>21.7</td>
<td>8.40</td>
<td>20</td>
<td>5144</td>
<td>4.11</td>
<td>0.80</td>
<td>21.6</td>
<td>8.30</td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>21.7</td>
<td></td>
<td>5</td>
<td>5149</td>
<td></td>
<td>22.1</td>
<td></td>
<td>166</td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>22.1</td>
<td>8.49</td>
<td>14</td>
<td>5163</td>
<td>4.59</td>
<td>0.95</td>
<td>22.2</td>
<td>8.42</td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>22.3</td>
<td></td>
<td>15</td>
<td>5178</td>
<td></td>
<td>22.6</td>
<td></td>
<td>74</td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>23.0</td>
<td>8.37</td>
<td>18</td>
<td>5196</td>
<td></td>
<td>24.5</td>
<td>8.45</td>
<td>144</td>
</tr>
<tr>
<td>22</td>
<td>24.5</td>
<td></td>
<td>6</td>
<td>5202</td>
<td></td>
<td>24.8</td>
<td></td>
<td>184</td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>25.1</td>
<td></td>
<td>0</td>
<td>5202</td>
<td>5.99</td>
<td>1.33</td>
<td>24.9</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>24</td>
<td>0</td>
<td></td>
<td>5202</td>
<td></td>
<td></td>
<td>24.8</td>
<td></td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>25</td>
<td>8.25</td>
<td></td>
<td>12</td>
<td>5214</td>
<td></td>
<td>8.23</td>
<td></td>
<td>128</td>
</tr>
</tbody>
</table>

Within 25 days,

- Total term. eggs and larvae: 5,214
- Alive: 258
- Unknown: 4,528
- Eggs introduced: 10,000

7. Discussion and conclusion

From the results of the experiment, the following conclusions are derived:

1. The aquatic life adheres to the rock slag immediately after dropping in the sea (Table 3 and Figs. 1 and 2).
2. The growth rate of fish reared in the containers contained slags slightly better than that of without slags (Figs. 3 and 4).
3. The survival rate of eggs and larvae, and the growth rate of alive larvae are slightly
better in the vessel contained slags than the container without slags (Table 4), and
(4) the increasing or decreasing of growth rate of the zooplankton, rotifer, is considered
depending upon the amount of slags supplied in the containers (Figs. 6a and 6b).
These may, generally, lead to the conclusion that the effect of slag on the aquatic life is
fairly good. The authors, however, suggest that the experiments mentioned above might
have been carried out with sufficient aeration. Conducting the experiment with insufficient
aeration, may yield in poor results, due to some undesirable substances gushed from slags
absorb oxygen quantity in water. This is resulted in Figs. 6a and 6b.

Acknowledgments
The authors wish to thank Mr. M. NAKAMURA of the Uragami Fisheries Experimental Station,
Kinki University for his generous cooperation. Gratitude are offered to Mr. Kulsak CHOTI-
YAPUTTA of the Department of Fisheries, Thailand Government for his kindness in reading
the manuscript before printing.

References
HIRAYAMA, Kazutsugu and S. OGAWA or T. KUSANO
(1971, 1972): Fundamental studies on physiology
Soc. Sci. Fish., 38, 1207-1214; 38, 1357-1363.
OFA, Michio, H. KOBAYASHI and Y. KAWAGUCHI
(1955, 1957): Effect of slag on paddy rice—II,
Soil and Plant Food, 1, 45-46; 2, 104-107.
SHINO, Sueo M. (1972): List of English names of
Japanese fishes with proposition of new names.

鉛滓の水族に対する影響
飯高勇之助 津田良平
森 永 勳 隈井英水

要旨: 鉛滓の水族に対する影響を知る目的で、三の実験を行った。先ず、鉛滓、自然栗石、レングダを直接海水中に呑してそれらに付着、集合する水族を観察した。その結果は、鉛滓の方が水族が幾分早く付着、集合するようであった(Table 3, Figs. 1, 2)。鉛滓を数きつめた水槽でタキリクバラタナゴの飼育を行い、小石を敷いた水槽での飼育と比較してみると、鉛滓水槽での魚の成長がよかった(Figs. 3, 4)。鉛滓の量を変化させた水槽でワムシの増殖実験を、また、鉛滓を呑した水槽でインディの卵を発生させ、その発生率と成長率を調べた。この場合、鉛滓の効果は幾分見られるようではあったが、明確には結論できなかった(Figs. 6a, 6b, Table 4).
寄稿

速さの変化に対するサボニアス・ロータの反応

——予 備 試 験——

高野 健三** 松山 佐和***

Réponse d'un moulinet de Savonius à l'écoulement variable en temps

Kenzo TAKANO et Sawa MATSUYAMA

ロータで速度の大きさを測る、流向外板で速度の向きを
測る方法は古くから使われてきた。速度がひんばんに変
わるとき、この方法の利点は、(1) ロータや流向外板の測定
数が大きく、流れの変化に追いつけること、(2) 一般に、
ロータと流向外板の測定数は等しくないと、測定の誤差
が大きくなること、である。

流向外板があり、行なわれていた時代には、流
外計の性能に対する関心はすく、感知器や流外計全体
の検定も重視されていたというようである。

最近はようやく、かなり精度の高い測定ができるよう
になってきたので、流外計の性能をよく調べておくことが
必要となったが、定常な流れに対する性能だけを調べ
のがふつうである。定常ではなく流れの変化がはま
れている。

そこで、流れの大きさが変わる場合、ロータがどのよ
うに変わるか、ということだけをいわしく調べてみる。

ロータとしてはサボニアス・ロータ**を用いる。現在の
サボニアス・ロータの形は、サボニアスの原型とは違う
が、そのまわりやすさ、作りやすさ、使いやすさなどを
考えると、これもおおがの間は、速度の大きさの感知
器としてしばしば使われるだろう。

この試験には、EG & G 流外計（102 型、写真式）を
利用した。ロータは、高さ 8.5 cm あまり、直径 16 cm
あまりのものを上下に 2段重ねにしている。Woods

Hole 海洋研究所での検定によると、回転しているこの
ロータを静水中におくと、回転速度が e-1 (=0.368) に
なるまで約 10 秒、停止するまで約 4 分かかる。

水槽の上を走る台車からこの流外計を吊下げ、台車の
速さをいろいろに変える。台車の速さの記録と、流外計
の記録とを比べれば、台車の速さ（流れの速さ）とロー
タの回転との関係がわかる。

この種の試験には、EG & G の流外計は適していない。
この流外計では、ロータの 1 回転ごとに一つのパルス
しか出てこない。その上、フィルム送りが遅い（3 mm
/min）ため、パルス発生の時刻を正確に読むことがむず
かしい。フィルム送りを早め、1/4 回転、または 1/8 回
転ごとに一つのパルスがおき、回転の瞬間にわかる
はずである。EG & G の流外計をそのまま変えるこ
とはむずかしいが、今回は、サボニアス・ロータの
試験だけではなく、このロータを使った EG & G 流
外計の試験という意味でもかねて、パルスの数、フィルム
の送りの早さについては手を加えず、そのまま使用した。

結果を第 1 報に示す。横軸が時間（分）、縦軸が速さ
で、実線はロータの回転から計測した速さ、点線は台
車の速さである。実験が段階状になるのは、あるパルス
と次のパルスの時刻を読み、その時間差から計算した速
さ、その時間差での平均速さとしている。これによる。
回転と速さの関係式としては、メカの取扱説明書にあ
っている、82 RPM/knot を使った。

台車の速さが変わるとき、ごく短い間だけ速くな
なるため、変速ギヤの入れかえのためである。

第 1 報は台車の速さを一定に保って 2 分間あるさ
った後、停止させたものである。台車の速さは、10 cm/sec

* 1973年 9月25日受理
** 理化学研究所 Rikagaku Kenkyusho（Institut de
Recherche Physique et Chimique）
*** 法政大学計算センター Centre de Calcul de
l'Université de Hōsei

(23)
と17.5 cm/secの2種類である。どちらの場合も、ローターの立ち上がりは早いが、停止する方は時間がかかる。
82 RPM/knotという換算率は、このロータに対しては適切ではない。ちなみに、この型のロータによる測定誤差は土2.5 cm/secとされている。台車が停止してからロータの回転が非常に遅くなるまでの時間は、もとの速さが10 cm/secでも、17.5 cm/secでもほぼ同じである。第2図は台車の速さを30秒ごとに、第3図は15秒ごとに変えたものである。第2,3図から、ロータは30秒ごとの流速変化には十分についてゆくといえるが、15秒ごとの変化には追いつけない。一般に加速に対する反応は早いが、減速に対する反応は遅い。
上記述べた理由によって、この装置ではロータの反応を細かく調べることはできないが、1分から数分程度よりも長い時間周期の現象を研究対象とする時には、このロータで十分である。

第1図 ロータの回転の加速と減速の2例。
実線はロータの回転から計算した速さ、点線は台車の速さ。

第2図 台車の速さの変化とロータの回転の変化。
実線はロータの回転から計算した速さ、点線は台車の速さ。

第3図 台車の速さの変化とロータの回転の変化。
実線はロータの回転から計算した速さ、点線は台車の速さ。

文献
The Biology of Aquatic Chitinoclastic Bacteria and their Chitinolytic Activities*

Mary A. HOOD** and Samuel P. MEYERS**

1. Distribution of chitinoclastic bacteria

Pelagic region. Chitinoclastic microorganisms have been isolated from numerous environments: fertilized garden soils, lake waters, plankton, exoskeletons of insects and crustaceans, intestines of both vertebrates and invertebrates, muds, and sands (as reviewed by VELDKAMP, 1955; and BENTON, 1935). The marine environment, which is rich in chitinous material, is an excellent source of chitinoclastic bacteria.

The initial, most notable study conducted in the pelagic zone or deep marine waters, was that of ZoBell and Rittenberg (1938). A very uneven distribution of chitinoclasts was found in the sediments off the California coast. This lack of uniformity was attributed to random distribution of substrate particles and substrate affinity or colonization of the bacteria. The most abundant biomass (10⁹ cells/g) was in the topmost sediment layers; concentrations of the bacteria decreased with core depth. No relationship was noted between bacterial biomass and depth of the overlying waters or distance from the mainland. Coarse sedimentary material, such as sands, supported the largest number of chitinoclastic microorganisms, due to a "concentration of the particles by the sorting action of sedimentation forces."

Within these waters and muds only 0.1 to 1.0% of the total bacterial biomass were chitinoclastic.

VELDKAMP (1955) also noted that soil types (terrestrial) influenced the quantity of chitin decomposers. Highest concentrations of chitinoclasts were detected in acid sandy soils. In these soils, actinomycetes formed the largest part of the total chitinoclastic populations. HOCK (1940) reported similar results in the Woods Hole area. Mud core samples from a depth of 878 m showed a concentration of 1.3 \times 10⁸ cells/g at the water-sediment interface. At a depth of 5 cm below the surface of the sediment, the number of chitinoclastic bacteria decreased to 5 cells/g. However, one mile offshore in five fathom waters, 1.5 \times 10⁶ cells/ml were found, further indication of the somewhat inconsistent pattern of distribution of chitin utilizers in pelagic waters. Similarly, LEAR (1963) demonstrated the scarcity of chitin decomposers in waters deeper than 1,000 m off the coast of California but noted a correlation between the abundance of the bacteria and depth. All samples showed less than 5.0 \times 10⁵ cells/ml; as depth of the water column decreased, the quantity of cells decreased proportionally. BIANCHI (1971) also found a scarcity of chitinoclasts in the deep sediments of the Mediterranean Sea. Of the 90 samples examined, only 10 revealed chitin decomposers: one of the samples, however, contained 2.4 \times 10⁹ cells/g.

One of the most comprehensive studies dealing with chitin utilizers is contained in a series of papers by SEKI and associates. SEKI and TAGA (1965c) conducted microbiological investigations in Sagami Bay, whose surface waters (100 m deep) originate from the neritic or coastal zone and the Kuroshio current. The intermediate waters (below 100 m and

* Received September 28, 1973
** Department of Food Science, Louisiana State University, Baton Rouge, Louisiana 70803, U.S.A.
This work is a result of research sponsored by NOAA Office of Sea Grant, Department of Commerce, under Grant 04-3-158-19.
above 1,000 m) are derived from the Oyashio undercurrent, while the deep bottom waters (below 1,000 m) represent waters from the Pacific Ocean. Each water mass had a characteristic quantitative and qualitative distributional pattern of chitinoclastic bacteria. The surface waters contained an average of 1.0–2.0 × 10⁸ cells/ml with the concentration of the bacteria decreasing to a depth of 200 m. From the intermediate waters, a maximal bacterial biomass was noted at 600 m, but chitin decomposers could not be detected in the bottom layers. The percentage of chitinoclasts within the total micro-biota decreased with depth, i.e., the upper layers contained the highest percentage of chitinoclasts while the lower masses contained less. The abundance of the chitin decomposers also varied with temperature. A ten-fold increase was noted from February to May when water temperatures were an average of several degrees higher than during the winter months. In contrast, a two-fold increase was observed in the intermediate waters where temperatures showed considerably less variation.

Along with a distinct biomass of chitinoclasts within each water mass, characteristic species were identified. These included *Beneckeia lipophaga*, *B. hyperoptica*, *B. idolothetica* and *B. chitinovora*. *B. lipophaga* appeared to dominate in the surface waters during the summer, while *B. hyperoptica* was prevalent during the other months. *B. hyperoptica* and *B. indolothetica* appeared in the upper intermediate waters, while *B. hyperoptica* constituted the sole *Beneckeia* species of the deeper intermediate waters. SEKI and TAGA (1965c) also identified the plankton of the waters and noted distinct species within each layer. The data suggested that certain bacterial types were associated with specific plankton.

**Neritic region.** Within the shallow waters of the coastal zone the abundance of chitinoclastic bacteria is noticeably greater than in the open ocean. CHAN (1970) disclosed high concentrations of chitin utilizers, comprising slightly less than 10% of the total biota, in seawater and sediment from the Puget Sound estuary. Sediments from deep subtidal, intertidal, and freshwater sites contained 2.0 × 10⁶ cells/g, 6.8 × 10⁴ cells/g, and 3.7 × 10³ cells/g, respectively. Similar to data from the pelagic region, the greatest concentrations of chitin decomposers were at the surface of the sediments with chitinoclastic bacteria decreasing with sediment depth. Surface waters averaged 2.5 × 10⁶ cells/ml while bottom waters exhibited fewer cells, 2.0 × 10⁶/ml. Seasonal variations were not apparent at deep sampling stations but in shallow areas, microbial biomass correlated with temperature.

In the neritic waters of Aburatsubo Inlet, SEKI and TAGA (1963a) found that only 0.4% of the total heterotrophic bacteria were chitinoclastic. No attempt was made to explain this unusually low concentration of chitinoclastic microorganisms. It was observed, however, that a considerable number of the bacteria were attached to living copepods, and a correlation was postulated between the percentage of chitin decomposers and planktonic crustaceans within the water column. Although the populations of bacteria on plankton and suspended matter showed little variation, a slight increase was noted during the summer and autumn months, probably related to a rise in temperature. An inverse relationship was also observed between the chemical oxygen demand (COD) and the percentage of chitinoclasts present. Five species of *Beneckeia* comprised the biota. *Beneckeia lipophaga* predominated in summer and *B. hyperoptica* appeared in winter and early spring. *B. indolothetica* and *B. chitinovora* were always found in association with plankton or suspended matter throughout the year, but dominated in late spring and autumn. *B. labra* was the least abundant of all the species.

In order to elucidate the ecological factors affecting the distribution of chitinoclastic bacteria, SEKI and TAGA (1965b), conducted a series of investigations defining those conditions for bacterial survival. The optimum temperature for all strains, excluding *B. chitinovora*, was 30°C with cessation of growth at 40°C. However, the isolates demonstrated strong heat resistance compared to other marine bacteria. A temperature of 50°C for 30 minutes was
needed to achieve bactericidal effects. All species exhibited a wide range of pH tolerance, with an optimum between 7.0 and 9.0. Growth was retarded below pH 7.0, while a pH of 4.0 stopped growth completely (SEKI and TAGA, 1963b). The bacteria proved to be strongly resistant to ultraviolet light, i.e., almost four times the amount of energy was required compared with that necessary to kill the same quantity of cells of Escherichia coli. All of the aforementioned Benekeea species grew well in a media containing 0.5 to 5.0 % NaCl; however, salinities of 12 % stopped cell division, and 25 % NaCl caused death of all cells after 24 hours. A pressure of 200 atmospheres inhibited growth but pressures of even 600 atmospheres did not destroy the cells (SEKI and TAGA, 1963b).

Distribution of chitinoclastic bacteria in the Barataria Bay salt marsh environment (Hood, 1973) appeared to be related to factors of 1) organic matter, 2) chitin deposition, and 3) to a lesser extent, temperature. Highest concentrations of chitinoclasts (10^6 cells/g sediment) were observed in areas of high organic content, i.e., the emerged marshland soil. The water column contained the least number of chitinoclasts (10^2-10^3 cells/ml). Peak bacterial biomass occurred simultaneously with optimum numbers of chitin-producing animals in the water column. Species of the genus Benekeea comprised the predominant bacterial biota, although within the marshland soil a much greater diversity of species was found. Large concentrations of chitinoclasts were associated with the intact exoskeleton and the digestive tract of penaeid shrimp. The function of the bacteria in the shrimp digestive tract is possibly that of enzyme production (chitinase) and elaboration of growth factors. Bacteria ingested by the animal may also provide a direct food source.

Association of chitinoclastic bacteria with aquatic animals. It is becoming increasingly evident that chitinoclastic bacteria are closely associated with certain marine invertebrates. Various reports suggest a commensal or symbiotic relationship between these microorganisms and plankters. SEKI and TAGA (1963a) found considerable quantities of chitinoclasts attached to living copepods within the water column. LEAR (1961) reaffirmed this phenomenon, suggesting that the external region of plankters served as the locus for microbial attachment. JONES (1968), using a radiolarian species, demonstrated the annexation propensities of marine bacteria in general. The surface of the radiolarian, Castanidin longispinum, contained a one thousandfold increase in chitin decomposers compared to the biomass of chitinoclasts in the seawater. BUCK and BARBAREE (1971) detected higher concentrations of chitin utilizing within large copepod species, than in the surrounding waters from which the copepods were collected. These Benekeea species were demonstrated to be indigenous to the copepod and were able to reproduce within the crustacean under certain conditions.

Several noteworthy disease-producing bacteria are found within the chitinoclastic group. These more widely studied organisms have been detected in conjunction with zooplankton and crustaceans. HESS (1937) reported a disease of the exoskeleton of living lobsters attributed to chitin decomposers. Chitinoclastic bacteria have been suggested as the causative agent of “brown spot” in shrimp (SINDER-MANN, 1971). A significant interaction has been documented between Vibrio parahaemolyticus, the causative agent of more than 70 % of the food poisoning in Japen, and fish and shellfish. This pathogen was identified in blue crabs in Chesapeake Bay (KRANTZ et al., 1969), commercial species of shrimp in the Gulf of Mexico (VANDERZANT and NICKELSON, 1970), and oysters (BARTLEY and SLANETZ, 1971). Of the several confirmed incidents of food poisoning in the United States, V. parahaemolyticus was traced to steamed crabs in Maryland (USPHS, 1971) and boiled shrimp in Louisiana (USPHS, 1972). KANEKO and COLWELL (1973) found that concentrations of V. parahaemolyticus and related species were correlated with population dynamics of zooplankton in Chesapeake Bay. The internal bacterial biomass in the zooplankton remained constant throughout the seasons whereas the external bacterial populations varied with
temperature, rising sharply during the summer months.

It appears that both the external and internal regions of marine animals offer an excellent microenvironment for the proliferation and survival of chitinoclasts. The concept of a truly indigenous biota within the digestive tract of fish and other aquatic animals is rather controversial. LISTON (1957) noted a distinct relationship between bacterial species and the species of fish. In contrast, POTTER and BAKER (1961) failed to find evidence of a consistent biota in fish or any relationship between species of fish and bacterial types. The ease with which the bacteria were removed indicated that the fish were only passive carriers of the microorganisms. MARGOLIS (1953) regarded the bacteria of fish to be a function of the ingested food, finding that intestinal tracts of non-feeding fish were virtually sterile. The focal point of this problem seems to be centered around the term "indigenous." An indigenous biota does not necessarily imply that only one or two species of bacteria will be found consistently in a specified environment. It does, however, suggest a restriction in bacterial types for, obviously, certain bacteria are more suited to a specific microenvironment than to others.

The microbiota of the digestive tract of marine fish as well as plankton were shown to have a distinct generic composition, i.e., Vibrio and Aeromonas (AISO et al., 1968); and had complex nutritional requirements, many hydrolyzing chitin. A microbiota consisting of a large percentage of chitinoclastic bacteria, sometimes exclusively chitinoclasts, has been reported for both marine invertebrates and vertebrates. For example, CHAN (1970) noted $1.0 \times 10^7$ chitinoclastic cells/g in the intestines of numerous species of fish from the Puget Sound estuary. Similarly, in the digestive tracts of the Japanese sea bass, OKUTANI (1966) recorded $1.7 \times 10^4$/g chitin degraders within the stomach contents, 5.4 to $1.6 \times 10^7$ cells/g within the intestines, and $2.3 \times 10^7$ cells/g within the pyloric caeca. In the stomach and intestines of yellow tail, chitinolytic bacteria were at concentrations of $2.0 \times 10^6$ and $1.4 \times 10^8$ cells/g, respectively (OKUTANI et al., 1967a). The intestines of octopus, squid and swell fish contained $1.5 \times 10^4$ cells/g, $4.3 \times 10^4$ cells/g, and $4.4 \times 10^5$ cells/g, respectively (SEKI and TAGA, 1963d). In addition whales were shown to contain chitinoclasts in their digestive tracts (SEKI and TAGA, 1965a).

Since the microenvironment of the digestive tract of marine animals is characterized by a restriction in bacterial species and a high microbial biomass, the question arises as to the function of these bacteria. Are these organisms coexisting in an active "partnership" or does the relationship involve a passive incorporation, wherein the endosymbionts are merely ingested? Unfortunately, little conclusive information is available on the role of such microorganisms, although several functions have been suggested: 1) the bacteria provide a direct food source, and 2) the organisms provide growth factor, i.e., vitamins, secreted by-products from cellular respiration, and products resulting from breakdown of substrates by bacterial enzymes (ALEXANDER, 1971).

It has been well established that bacteria serve as food for protozoans (LUCK et al., 1931). ZOBELL and FELTHAM (1938) demonstrated an analogous situation in higher invertebrates as well. Mussels, Mytilus californianus, when submerged into a suspension of bacteria, removed large quantities of cells, rejecting some as pseudo-feces but ingesting most of the cells. Likewise, the ingestion of bacterial cells was observed using oysters. Bacteria in different stages of lysis were noted in the stomach content of the mussels and oysters. Using 31 strains of bacteria as the exclusive component of the diet, the mussels survived and gained weight. The waters in which the mussels lived, however, had to be changed often due to the accumulation of toxic bacterial metabolites. Similar results were obtained when bacteria were fed to the sand crab, Emerita analoga, although the sand crabs showed a more sensitive reaction to high quantities of bacteria than did the mussels. Sipunculid Gephyrean worms, Dendrostoma zoometricola, failed to grow on a bacterial diet but main.
tained their initial weight. Concomitant with these studies, extracts of the digestive enzymes from the aforementioned animals were able to lyse a number of species of bacterial cells. In summation, ZOBELL and FELTHAM (1938) concluded that the abundance of bacteria in marine sediments provided an important secondary food source or even an exclusive food source for bottom feeders. Other workers reported similar data. MACGINITE (1932) supplying a *Pseudomonas* species to the bottom feeder, *Urechis caupo*, observed excellent growth. BURKE (1933) found development of larval stages of the frog, *Rana pretiosa*, on a bacterial diet comparable to that on a controlled diet. Recently, CONDREY et al. (1972) demonstrated that diets of diatoms plus bacteria gave greater feeding efficiencies in penaeid shrimp than diets without bacteria, supporting the theory that bacteria act as an important supplementary food.

Unfortunately, it is much more difficult to establish any specific relationship between a bacterial "probiotic", or growth factor, and a higher animal. Such relationships as those of rumen bacteria (HUNGATE, 1960) and insect microorganisms (STEINHAUS, 1960) have been well studied, but very little information is available concerning the interactions of microorganisms and marine animals. Certain amino acids (VELDKAMP et al., 1963), vitamins and coenzymes (WILSON and PARDEE, 1962), polysaccharides such as dextrans and levans (WILKINSON, 1958) and other probiotics (LILLY and STILLWELL, 1965) "are produced by heterotrophic microorganisms in excess of their needs and released as extracellular products to the environment." May investigations, however, failed to isolate the probiotic produced by the microorganism or to show the effect of the growth factor on the animal with which the bacteria is associated.

In an effort to define the role of the chitino-
clastic bacteria within the digestive tracts of marine invertebrates, SEKI and TAGA (1963a) calculated the maximum theoretical value of bacterial chitinase activity in the octopus, *Polyopus vulgaris*, the squid, *Loligo edulis*, and the marine fish, *Canthigaster riculatus*. Having determined the number of chitin decomposers present in the digestive tract, the amount of chitin the microbial population could degrade under ideal conditions, the amount of chitin in the diet of the invertebrates, and the resident time of the substrate in the tract, the value obtained was a mere $3 \times 10^{-4}$ mg of chitin decomposed/cubic centimeter of digestive tract. This negligible quantity, 0.003 to 0.0008 %, suggested that the bacteria do not produce enough enzyme to significantly degrade chitin.

2. **Taxonomy of chitinoelastic bacteria**

BENECKE (1905) was one of the first to describe a bacterium, *Bacillus chitinovorans*, which utilized chitin. There are numerous investigations concerning non-marine chitinoelastic microorganisms representing a variety of genera such as *Flavobacterium*, *Chromobacterium* (VELDKAMP, 1955), *Bacillus* (BAXBY and GRAY, 1968) as well as actinomycetes of the genera *Micromonospora*, *Streptomyces*, *Nocardia* (VELDKAMP, 1955) and fungal species (GRAY and BELL, 1963; LEOPOLD and SEICHAYTOVA, 1967; OTAKARA, 1964). The following discussion, however, will concern only marine bacteria (MACLEOD, 1965).

ZOBELL and RITTENBERG (1938) isolated thirty-one chitin utilizers from marine sources but did not attempt to classify them, although two species were tentatively assigned *Vibrio* species. HOCK (1941) described the species, *Bacterium chitinophilum* and *Bacterium chitino-
chroma*, but failed to mention flagella type, an important criterion for later reclassification. Gram-negative chitin decomposers, fermenting glucose with the production of acid but no gas, were isolated by CAMPBELL and WILLIAMS (1951). The polarly flagellated strains were placed in the genus *Pseudomonas*, while those with peritrichous flagella were included in the genus *Achromobacter*. Those assigned to *Pseudomonas*, however, were placed in an unsatisfactory group since this genus is restricted to bacteria having an oxidative metabolism rather than a fermentative one. The new species described and assigned to *Achromobacter* were subsequently placed into a newly created genus *Beneckeia* (BREED et al., 1957).
OKUTANI (1966) described and proposed the name of six chitinoclasts from the digestive tract of marine fish as follows: Vibrio gerris, V. orphus, V. labrakos, Aeromonas skiania, A. chitinophthora, and Alginomonas channe. Other chitin utilizers isolated were similar to those previously named: V. piscium (BREED et al., 1957), V. anguillarum (SAKAZAKI et al., 1970), V. parahaemolyticus (SAKAZAKI et al., 1963), Aeromonas liquefaciens, A. punctata, A. hydrophila (BREED et al., 1957), Bacterium chitinophilum (HOCK, 1941) and B. lepiderothosae (CAMPBELL and WILLIAMS, 1951).

Six isolates from Japanese waters were classified as Agarobacterium, Benekeea and Pseudomonas (KIHARA and MOROOKA, 1962). SEKI and TAGA (1963a) described thirty-nine strains of chitinoclastic bacteria using Bergey's scheme (BREED et al., 1957). They also isolated species similar to V. alpensis, first described by ZOBELL and UPHAM (1944), and Pseudomonas cryothasia (CAMPBELL and WILLIAMS, 1951). CHAN (1970) separated the chitinoclasts from Puget Sound estuary into the following genera: Vibrio, Pseudomonas, Cytophaga, Aeromonas, Photobacterium, and Streptomyces. He reported the abundance of Vibrio species, similar to V. marinus (redefined by COLWELL and MORITA, 1964) and V. gerris. V. algolyticus, also isolated, was first named Oceanomonas algolyticus by MIYAMOTO et al. (1961) but SAKAZAKI (1968) designated it as a second biotype of V. parahaemolyticus and gave the organism its present name.

Upon examination of the criteria for separation of marine Vibrio, Pseudomonas, Benekeea, and Aeromonas it becomes evident that little difference exists using classical techniques. Vibrio is defined in Bergey's Manual (BREED et al., 1957) on the basis of cell curvature and flagellation. The genus is restricted to polarly flagellated oxidase positive, curved rods which are facultatively anaerobic and ferment glucose with acid production but no gas. DAVIS and PARK (1962) noted the subjectivity of using cell curvature as a criterion and expanded the genus to include straight rods. Aeromonas consists of oxidase positive, facultatively anaerobic polarly flagellated or non-motile, straight rods fermenting glucose with or without the production of gas (EDDY, 1960). To distinguish the two genera, molecular techniques are required. Aeromonas contains 50 to 60 moles ratio GC (DNA base composition) (HILL, 1966), while Vibrio has 40 to 50 moles ratio GC (COLWELL, 1970). Benekeea is composed of peritrichously flagellated, facultatively anaerobic straight rods of marine origin which decompose chitin and ferment glucose with the production of acid but no gas (BREED et al., 1957). ALLEN and BAUMANN (1971) have shown that flagellation within Benekeea species may vary with cultural conditions, exhibiting peritrichous flagella when grown on solid medium but having a single, polar flagella when grown in liquid medium.

In taxonomic studies of marine bacteria, BAUMANN et al. (1971) re-evaluated the classification of the gram-negative rods of marine origin capable of fermenting glucose without production of gas. Using classical biochemical and morphological tests, DNA base composition, and numerical analysis, 145 strains representing Benekeea, Vibrio, Aeromonas, Pseudomonas, and Photobacterium were reassigned to Benekeea, sensu BAUMANN. Although the BAUMANN scheme has received criticism, it represents an excellent attempt to group a number of similar species of marine origin.

3. The rate of chitin degradation

It is difficult to discuss degradation of a substrate in "non-enzymatic" terms, particularly if an enzyme system is the primary mechanisms by which the specified substrate is decomposed. However, enzymes are limited not only by their indigenous properties but also by those factors which limit the growth and development of the organisms which elaborate the enzymes. For example, if an organism produces an extracellular enzyme whose cell-free characteristics include inactivation at pH 6-7, but the organism is neither found in nature nor can survive at pH's other than 6 and 7, the enzyme, for all practical purposes, is non-functional within that biological system. It is with these considerations in mind that the process of chitin degradation...
is discussed.

Several papers, notably those of SEKI (1965a, b) and SEKI and TAGA (1963c), have attempted to determine the rates of chitin mineralization in the ocean environment. Initially, pure cultures of the five predominant chitinolytic bacteria, all *Beneckeia* species, were grown in a chitin medium under conditions approximating those in the sea. Total bacterial growth and chitin removal were simultaneously monitored. The rate of decomposition obtained was 30 mg chitin/24 hours/10^9 bacterial cells. Little variation in the rate of degradation was noted with the bacterial type, the initial concentration of bacterial inoculum, or the initial concentration of chitin. The surface area of the particle affected the rate of decomposition inversely, i.e., the smaller the particle, the more rapid the material was broken down. Hydrostatic pressure also affected the rate; a pressure of 200 atmospheres decreased the rate by 40 %. Assuming that the average chitin particle in the ocean is less than 0.033 cm, the rate of decomposition in the environment was calculated as 27 mg/24 hours/g of chitin at 25 °C. The complete mineralization of deposited chitin was then postulated to occur within 38 to 67 days.

CHAN (1970) demonstrated that *Vibrio* species from the Puget Sound estuary decomposed chitin at a rate of 80-130 mg/hour/10^9 bacterial cells at 22°C or 19.2–31.2 mg/24 hours/10^9 cells. Using a simulated model seafloor system, LISTON et al. (1965) demonstrated a rapid loss of CaCO₃ initially from a chitin substrate followed by a slower loss of protein and chitin. The rate of chitin degradation with Puget Sound sediment was 18.8 mg chitin/day, but with mixed coastal sediments it was 4.5 mg chitin/day (LISTON et al., 1966). The carbon conversion rate, however, was higher for offshore sediments, i.e., 48.4 % compared with 10.7 % for Puget Sound sediments. The difference was postulated to reflect dissimilarities between the microbiota of the two environments.

In *in vitro* studies, SEKI (1965b) revealed areas of higher chitin decomposition, i.e., 75 mg chitin degraded/30 days, just below the water-sediment interface, than in the water column or in the deeper sediment zones. Collected cores of sediment from 2 to 10 cm deep and seawater, sterile seawater, sterile chitin strips were incubated in containers at 20°C and 10°C for 30 days. The pH and Eh were maintained but the bacterial cell crop was not enumerated. While the closed systems do not duplicate conditions in the natural environment due to lack of exchange, nutrient inflow and waste outflow, the data identify microenvironments capable of supporting greater chitin mineralization.

*In situ* rates of chitin degradation "native chitin" in the salt marsh environment (HOOD, 1973) were extremely high, i.e., 87 mg/day/g chitin, while pure culture and *in vitro* rates were similar to those reported in the literature.

From the results of the aforementioned workers (SEKI, 1965a, b; SEKI and TAGA, 1963c; CHAN, 1970), it is apparent that chitin degradation is primary a function of temperature and available organic matter. Factors which do not fluctuate greatly in the marine environment, i.e., pH and salinity, have little effect on the growth of chitinolytic bacteria or on the rate of chitin decomposition. The indigenous microbiota may also determine the rate at which the substrate is mineralized.

4. The chitinase enzyme system

The structure of chitin. The term "chitin" has been applied in this review to the chemically pure polymer of N-acetylglucosamine as defined earlier. Since the term chitin may have one meaning to the biologist and another to the chemist, it is necessary to differentiate the terms "native chitin," "decalcified chitin," and "chitin".

Pure chitin is rarely found in the natural environment but occurs in combination with proteins and inorganic salts, primarily calcium salts. When in such conjunction, it is considered native chitin. The composition of native chitin in the cuticle of animals varies with species. Hard exoskeleton, such as found in crabs, contains more salts and tightly bound protein than soft cuticle typical of shrimp. The pure chitin in the exoskeleton is highly organized
into linear or fibrous micelles, the orientation of the molecular chains resulting in several X-ray diffraction patterns. On the basis of the patterns, chitin is separated into α, β, and γ types, each composed of chains of the N-acetylglicosamine unit linked in the 1→4 β glucosidic manner but arranged in a different physical structure (RICHARDS, 1951).

The backbone structure of α chitin from insects and crustaceans contains two helical polysaccharide chains oriented in opposite directions with screw axes along the chain directions. There are four asymmetrical N-acetylglicosamine residues per cell unit. The spatial configuration of side groups are given in Fig. 1. The two chains are linked by hydrogen bonds, the first between the NH (amine) group on one chain and the CO group in the neighboring amino-acetyl group of the other chain. A second bond is between the oxygen and the hydroxyl group of the hydroxyl methyl side group. The bonds give the chains a bent or buckled configuration. For a more detailed explanation of the bonding see DEWELTZ (1960), CARLSTRÖM (1962), and RAMAKRISHNAN and PRASAD (1972).

(HACKMAN, 1964). The γ type is found in cuttlefish shell and shows a more disoriented X-ray diffraction pattern than the other chitins (HACKMAN, 1960).

The exact nature of the association between protein and chitin is unknown. However, HACKMAN (1960) suggested that the protein is linked by stable covalent bonds, resulting in a glycoprotein complex. The protein appears to be linked to the chitin chains through the aspartyl and histidyl residues (HACKMAN, 1964). In soft cuticle a large portion of the protein can be removed by hot water, suggesting a loosely-bound water soluble protein, while a small amount can be removed by 5% KOH extraction. Contrariwise, in hard cuticle less protein is removed by water and more is removed by KOH extraction (RICHARDS, 1951). DeMets and Jeuniaux, as reported by RICHARDS, (1951), extracted a Streptomyces chitinase, which could not attack chitin until the protein was removed by alkaline digestion. BULL (1970) demonstrated a similar phenomenon with a chitinase from Aspergillus nidulans. Melanin-bound chitin proved extremely resistant to this chitinase system, but activity was restored when the melanin was removed.

Calcium carbonate exists in the chitinous exoskeleton of crustaceans in the primary form of calcite. The percent composition varies with each species ranging from 16 to 60% of the dry weight of the cuticle. Other inorganic salts include MgCO₃, Ca₅(PO₄)₃, SiO₂ (Al, Fe)₂O₃, MgO, CaO, P₂O₅ and CaSO₄, but the salts are found only in trace quantities. Calcite may occur in either macro or macro crystals in granular, platelike, circular symmetrical, or disc-like spherical patterns. Commonly, the crystals result in a mosaic pattern but there is no fusion of the crystallites and each crystal is a self-differentiating unit (RICHARDS, 1951).

Enzymatic mechanisms involved in the degradation of chitin. Several enzymes are responsible for the breakdown of chitin by an exocellular system to products which can be taken up by the cell and then utilized for intracellular metabolic processes. The following schematic is a composite of previously reported steps involved in chitin degradation.
The prehydrolytic factor (CH₄) of chitinolytic Chitin (Susceptible) activity

Chitinase → Chitodextrins

(cellular uptake) chitobiase

short chain or chitinase soluble chitin residues

Chitobiase dimer monomer

(cellular uptake) deacetylase

N-acetylglucosamine Glucose

Gluconamidase Glucose

REYNOLDS (1964) found that the exocellular chitinase produced by a Streptomyces species attacked chitin with the formation of two end products, the monomer, N-acetylglucosamine, and the dimer, N,N-diacyctylglucosamine. Like many other polysaccharides, one or more enzymes degrade the substrate to a biose stage which is then split by another enzyme to the monomer stage. No chitodextrin, glucosamine, or glucose were detected as products of the enzyme system. BERGER and REYNOLDS (1958) resolved a chitinase system of Streptomyces griseus into two chitinases with similar activities, and a chitobiase. Chitin was hydrolyzed by the chitinases to N-acetylglucosamine and N,N-diacyctylchitobiose without the formation of detectable concentrations of higher saccharides. Chitodextrin was cleaved randomly, forming a number of intermediate saccharides by the chitinase and then further hydrolyzed to the monomer and the dimer. The trimer, N,N,N-triacetylcitotriose, and the tetramer, N,N,N,N-tetra acetylcitotetraose were broken down to the monomer and dimer stages also. The chitobiose hydrolyzed by the β phenylglycosides of N-acetylglucosamine, the di- and trisaccharides of N-acetylglucosamine but none of the higher saccharides. KIMURA et al. (1967a) demonstrated the presence of three products from chitin hydrolysis by a chitinase extracted from the snail, N-acetylglucosamine and two oligosaccharides of the N-acetylglucosamine were detected on chromatographic analysis.

OKUTANI (1966) showed that the end products of a chitinase system from an animal (a marine fish, Lateolabrax japonicus) and a bacterial source (Vibrio gerris and Aeromonas chinophilophora) were N-acetylglucosamine, and its oligosaccharide as well as glucosamine. It was suggested, however, that the glucosamine present was due to deacetylation of chitin during preparation. The composition of the oligosaccharide was not identified but it was probably the dimer, N,N-diacyctylchitobiose. Other workers (HACKMAN, 1964; VELDKAMP, 1955) reported glucosamine as an end product of chitin degradation, but in each case it was suggested that this was due to deacetylation in the preparation of chitin. When chitin is treated with acid (either dilute HCl in the decalcification procedure or with concentrated HCl in the process of swelling chitin, i.e., "molecular chitin"), some of the N-acetylglucosamine units can be deacyctylated. VELDKAMP (1955), however, detected the accumulation of acetic acid in the culture fluids of Pseudomonas chinophilophora in the presence of chitin under conditions in which bacterial metabolism was inhibited. It was concluded that the only mechanism by which the acetic acid could accumulate was by direct deacetylation of N-acetylglucosamine to glucosamine and acetic acid by the action of a deacetylase.

A prehydrolytic factor similar to that reported for cellulolytic systems was suggested by MONREAL and REESE (1969). Little correlation was found between activity of the chitinase on crystalline and swollen chitin. If only one component were involved there would have been a strong correlation between the activities on both substrates. The chitinase of Serratia marcescens, however, showed increased activity on swollen chitin with incubation, but decreased activity on crystalline chitin. The data indicated that a special enzyme (CH₄) was required to modify the crystalline chitin to a form susceptible to the glucanase. A synergistic effect was not evident on combining the chitinolytic factors; however, LEUNIAUX (1955, 1959a) observed such effects when several chitinase fractions were combined.

The chitinase of Serratia marcescens was also demonstrated to be a highly specific
enzyme acting only on the β 1,4 polymer of N-acetylglucosamine (MONREAL and REESE, 1969). The mechanisms of the enzyme system were characterized as similar to those for the enzyme system of Streptomyces (BERGER and REYNOLDS, 1958): 1) chitinase, which included a random endoglucanase producing soluble intermediates upon chitin hydrolyzation, and 2) a glycosidase which hydrolyzed these intermediates to the monomer stage.

The terminal steps in the breakdown of chitin have not been established at this time. To date, no evidence has been found to indicate the presence of an exocellular deacetylase or a deaminase elaborated by an organism which also produces a chitinase or a chitobiase. ZoBell and Rittenberg (1938) first suggested that chitin degradation might occur from the splitting-off of the amino-acetyl group. These workers detected ammonia and acetic acid in the culture media of marine chitinolytic bacteria grown in the presence of chitin. Data compiled by OKUTANI and Kitada (1968a,b) showed large amounts of acetic acid and lactic acid, as well as other organic acids, which accumulated in the media when marine chitinoclasts were grown on chitin as the sole carbon source. Acetic acid also accumulated but to a lesser extent in media devoid of chitin. These experiments do not definitely demonstrate that exocellular deacetylase occurs, but rather suggest that the organic acids detected are metabolic intermediates produced by complex intracellular reactions. However, Faulkner and Quastel (1956) noted a specific deacetylase in E. coli. The enzyme was exocellular and capable of attacking the acetyl group on the N-acetylglucosamine unit (DOBROGOVZ, 1968). Wu and Wu (1971) demonstrated that the deacetylated glucosamine was then transported into the cell by a specific enzyme system. For a review of the pathway see OKUTANI and Kitada (1970).

Little information is available concerning deamination of glucosamine. Although the assimilation of amine compounds by marine microorganisms has been shown, the enzymatic mechanisms for the utilization of the amines have not been clearly demonstrated (MEYERS and NICHOLSON, 1970). Utilization of methyl amine by marine bacteria occurs by a demethylation process rather than a deamination or amine oxidase mechanism (BUDD and SPENCER, 1968). Glucose as well as N-acetylglucosamine was detected in the culture fluid of a Chytrium species grown with chitin (REISERT, 1972). It was explained, however, that the glucose might have been a product indigenous to the spore, transferred to the fluid and released upon germination rather than a breakdown product.

**Distribution of chitinase systems.** Chitinases are found in a variety of organisms including bacteria, fungi, invertebrates and vertebrates (even some mammals). Of these, microorganisms probably provide the most convenient source of chitinase and for this reason these systems are more generally studied. Whether the systems found in the various animals examined are similar to those of microbial origin remains to be demonstrated. Jeuniaux (1971) considered all chitinase systems examples of regressive evolution or "enzymapheresis." Chitinases and chitobiases in the primitive unicellular organism are widespread and well-developed systems. In the more advanced phyla, however, chitinase systems are less widespread and less developed, in many cases characterized by the loss of one of the chitinolytic enzymes. Only in those organisms recognized as chitin consumers are the enzymes retained. Animals which have adapted to diets devoid of chitin have subsequently lost the ability to produce chitinases.

**Microbial chitinases: cultural conditions.** The first consideration in the study of microbial chitinases is the disclosure of conditions which promote production of the enzyme. Such cultural conditions were reviewed by MONREAL and REESE (1969). The type and concentration of chitin on which the organisms were grown proved to be important. Little enzyme was elaborated on mushroom chitin or on beetle (Tribolium) chitin, while shrimp chitin permitted higher enzyme production. Maximal yields of chitinase were obtained on highly purified commercial chitin. BAXBY and GRAY (1968) also noted increased growth of
bacteria on shrimp chitin than on lobster chitin. In the investigation, the degree of purity of the substrate may have contributed to the results. The shrimp was highly purified while the lobster chitin was only partially purified. Other factors influencing chitinase production were particle size and initial concentration of chitin. With the reduction of substrate particle size an increase in chitinase activity was noted. Maximal yields of enzyme occurred on 1.5 % to 2.0 % chitin. For the fungus, *Chytridiomyces*, only 0.2 % substrate was required for highest enzyme production (Reisert and Fuller, 1962). Greatest activity was detected on the substrate chitin, with the soluble dimer, N,N-diacectylichitobiose, giving approximately one-third the yield. The monomer, N-acetylglucosamine, gave less than 7 % of the activity while chitosan, glucosamine, cellulose, cellobiose, glucose, and lactose gave little activity. Therefore, the probable inducers of chitinase are soluble oligomers derived from chitin (Monreal and Reese, 1969). However the chitinase of the fungus, *Beauveria bassiana*, produced chitinase without the addition of chitin to the medium, indicating that this system is a constitutive one (Leopold and Samsinkova, 1970).

Okutani and Kitada (1968a,b) observed inhibition of chitinase production when several chitinolytic marine bacteria were grown on acetate and lactate, but little inhibition was noted when the bacteria were grown on succinate. Clarke and Tracey (1956) found that glucose in the culture medium depressed chitinase production by a factor of 3 to 5.

Highest chitinase yields were obtained in 4 to 5 days for *Serratia marcescens* and several other species (Monreal and Reese, 1969), 4 to 5 days for the fungus, *Beauveria bassiana* (Leopold and Samsinkova, 1970), and 6 days for the *Streptomyces* species (Reynolds, 1954). Optimum temperature for several bacteria and an *Aspergillus* species was 30°C. The initial pH for highest enzyme production varied with species type but correlated with the microbial growth pattern, *i.e.*, bacteria showed optimum chitinase production at neutral pH 7.0-7.5, fungi at pH 4.5 (Monreal and Reese, 1969).

**Microbial chitinases: properties of the cell-free extract.** It has been documented that extraneous protein in an enzyme extract causes marked changes in the rate of substrate breakdown and in the effect of pH on the activity of the enzyme. Thus, a necessary prerequisite for characterization of an enzyme is purification (Tracey, 1955). Since such purification is an arduous and time consuming task, many of the reports concerning the properties of chitinase have involved crude extracts. With these observations in mind, some of the properties of chitinase are reviewed below.

Chitinases of several species of *Streptomyces* have been purified and obtained in large enough quantities to determine many of the physical and chemical properties (Skujins et al., 1970; Jeuniaux, 1951, 1956, 1959b). The pH for optimal activity was pH 5.0 for the chitinase of *Streptomyces antibioticus* (Skujins et al., 1970) while for another *Streptomyces* species it was pH 6.2 (Berger and Reynolds, 1958; Reynolds, 1954). The enzyme of *S. antibioticus* was shown to be relatively stable with respect to drying and heating, with inactivation at 65°C within 3 hours. The sequence of ion inhibition was as follows: Mg**2+**<Co**2+**<Zn**2+** (with the Na+ ion inhibiting the enzyme more effectively than the Ca**2+** ion). The Ca**2+** ion stabilized the enzyme in small quantities (Skujins et al., 1970; Jeuniaux, 1959b). In an *Actinomyces* species, Cu**2+** had a greatly reducing effect on the activity of the chitinase, while Mg**2+** caused some activation of the enzyme (Wigert, 1962).

Sedimentation tests revealed a molecular weight of the *Streptomyces* chitinase of 29,000 (Skujins et al., 1970; Jeuniaux, 1959b). Because the chitinase reaction takes place after adsorption of the enzyme to the surface of the substrate and, the Michaelis-Menten equation is not applicable to enzymatic reactions at surfaces, the K<sub>s</sub> of the chitinase is not a valid characteristic (Skujins et al., 1970).

A study of the chitinase of the fungus, *Chytridiomyces hyalinus*, disclosed greatest activity at a pH similar to those in *Streptomyces*, *i.e.*, pH 5.5 (Reisert, 1972). Activity
was negligible below 10 °C, optimal at 25 °C, and completely lost at 45 °C. Neither N-acetylglucosamine nor glucose inhibited the activity, but Cu** and Cd** caused total inhibition, while Co**, Li**, Mg**, and Na** decreased activity in the respective order. Similar results were reported for the chitinase system of the fungus, Aphanomyces astaci (UNESTAM, 1968).

The chitinases of several marine chitinolytic bacteria, Aeromonas chitinophthora and Vibrio gerris, were partially purified and characterized as follows: pH optimum 5.5-6.0 and 7.0, respectively; stability maintained within a range of pH 5.0-9.0; and temperature optimum 40 °C (OKUTANI, 1966). The crude extract of chitinase from Serratia marcescens exhibited maximum activity at pH 6.4 and 50 °C with 50% loss of activity at 50 °C for 1 hour at pH above 7.2 and below pH 4.8 (MUNAREL and REESE, 1969).

Chitinase of marine invertebrates. Numerous reports document the presence of chitinases in animals. However, since it is beyond the scope of this review to discuss distribution in general, this discussion will be limited to the properties of chitinases from marine invertebrates. For a more complete review of the subject, see ELYAKOVA (1972), JEUNIAUX (1961), TRACEY (1955) and FRANKIGNOL and JEUNIAUX (1965).

A series of investigations by OKUTANI (1966), OKUTANI et al. (1967a, b) and SERA and OKUTANI (1968) described the properties and mechanisms of the chitinase systems of the Japanese sea bass, Lateolabrax japonicus, the yellow tail fish, Seriola quinquemaculata, the rainbow trout, Salmo irideus, and the sea bream, Acantopagrus schlegeli. Highest activity was noted in the stomach of the vertebrates with some activity in the pyloric caeca and the intestines. The chitinase from the sea bass gave optimum activity under the following conditions: pH 4.0, 50 °C, stability range of 3.0-8.0 at 60 °C for 30 minutes. Similar results were observed with the chitinase of the yellow tail. The trout chitinase was slightly less stable than the other enzymes with an optimum pH and temperature of 4.5 and 30 °C, respectively. The optimum pH and temperature of the bream chitinase was 3.4-4.0 and 60 °C, respectively.

The enzymatic products of chitin hydrolysis were identified as N-acetylglucosamine and higher oligosaccharides of N-acetylglucosamine (OKUTANI, 1966). It was suggested that a chitinase randomly attacked the linkages of chitin forming the dimer, trimer, and higher chain units, after which a chitobiase hydrolyzed the dimer and trimer to the monomer, N-acetylglucosamine. It thus appears that this system resembles that found in micro-organisms.

A chitinase from a snail, Helix species, was partially purified by KIMURA et al. (1967a, b). The state of purity of the substrate was shown to be very important for maximum activity. After decalcification of chitin an increase of 80% in activity of the enzyme was found, while after deproteinization a 20 to 30% increase in activity was noted. The former increase was suggested as a result of removal of enzyme inhibitors, Ca** ion primarily. Certain other ions, Fe**, Mn**, and Zn**, were demonstrated to increase activity. The chitinase was specific and did not react with any other polysaccharides or mucopeptides other than chitin. Upon digestion of the substrate, identification on chromatographic paper revealed N-acetylglucosamine.

A chitinase system was demonstrated in the gastric juices of the American lobster, Homarus americanus, by BROCKERHOFF et al. (1970). A highly active chitiobiase was detected but very little chitinase activity was noted. The assay used for chitinase activity, chitin azure, may have been a poor one, with low activity possibly attributed to the substrate or other conditions. The optimum pH and temperature for the chitiobiase was pH 5.0 and 30 °C and for the chitinase, pH 3.0-8.0 and 37 °C, respectively. Of all the enzymes detected in the gastric juice, only the chitiobiase demonstrated an optimum pH similar to that of the normal pH of the gastric juice within the animal. KOOIMAN (1964) reported chitinase activity at optimum pH of 3.0-4.0 for related species, Astacus fluviatilis and Homarus vulgaris.

The problem proposed by KOOIMAN (1964)
was as follows: enzymes found in the digestive tract of crustacea may not be indigenous, but rather produced by the endosymbionts within the animals. To date, no crustacean producing chitinase has been found with chitinoclastic bacteria absent. KOOMAN (1964) demonstrated the indigenous nature of enzymes by showing that chitinase was secreted by the digestive gland, the hepatopancreas, and that chitinolytic microorganisms were not present in this gland in sufficient concentrations to produce a bacterial chitinase. However, the method used by KOOMAN to detect bacterial chitinase was designed to detect only a constitutive chitinase rather than an adaptive one. Thus, the question of the presence of an indigenous enzyme has still to be demonstrated.

Enzymatic studies revealed high chitinase activity by the chitinoclasts associated with shrimp as well as a moderately active indigenous chitinase produced by the hepatopancreas of the shrimp in the salt marsh environment (HOOD, 1973). Optimum activity of both enzymes was at 40°C and pH 7. The Na+ ion inhibited the bacterial enzyme while the Ca++ ion had the greatest inhibitory effect on the penaeid enzyme. The bacterial enzyme was shown to be induced while the shrimp enzyme was constitutive in nature. Both bacteria and hepatopancreas produced 1) a chitinase, 2) a chitobiase, 3) no chitosanase, and 4) a deacetylase. The end products of chitin degradation are oligosaccharides of N-acetylglucosamine, N-acetylglucosamine, and glucosamine.

References


CLARKE, P. H. and M. V. TRACEY (1966): The occurrence of chitinase in some bacteria. J.


The Biology of Aquatic Chitinoclastic Bacteria and their Chitinolytic Activities


学会記事

1. 昭和48年11月8日、東京水産大学において編集委員会が開かれ第11巻第4号の編集が行われた。

2. 昭和48年11月19日、東京水産大学において第1回目

3. 福洋海洋学会賞受賞候補の推薦委員会が開かれる。委員長である、評議員全員を命名書によって12月15日までに受賞候補1件ずつを推薦し、それらを Encounterに依頼することを決定した。

4. 下記の諸氏が入会された。

5. 退会

東京工業大学水産学会

6. 交換及び寄贈図書

1) 稲戸海洋気象台観象、No. 190。
2) 水産業騒動論、4(8)～10。
3) 研究実験報告、22(8,9)。
4) 海洋機器開発、5(10)。
5) 錦鰲通信、260, 267。
6) 国立科学博物館研究報告、16(3), 1973。
7) 海洋開発動向、(水産業古書)。
8) なつしま、No. 4, 1973。
9) 湖沼技術研究所報告、12(3), 1973。
10) 湖沼技術資料、No. 164～170, 1973。
11) 湖沼技術研究所年報、昭和48年版。
12) 長崎県立博物館研究所、No. 6, 1973。
13) Ocean Age, 5(11, 12)。
14) Science et Pêche, No. 226, 1973。

16) The Scientific Reports of the Whales Research Institute, No. 25, 1973。

監事
久保田 淳、岩崎秀人

評議員
赤松英雄、秋山 勉、阿部宗明、阿部友三郎、新崎盛雄、齋藤謙一、石山 恭、市村俊美、井上真行、今村 豊、岩下光男、村尾 信、川原田 慎、神田敬二、斎藤義一、鬼頭正隆、草野孝史、齋藤泰一、佐々木隆、杉浦秀雄、高木和信、高野健三、遠田時男、富永政英、奈良敬二、足立 恵、根本敏久、沢井正男、松本治、松尾邦之助、丸茂隆三、森田良美、山中英之助（五十音順）

（43）
うみ 第11巻 第4号 (1973)：日仏海洋学会誌

賛助会員

東京都千代田区有楽町1-12-1

鋼管市金町11

東京都千代田区長崎町1-4

東京都千代田区大手町2-2-1 新大手町ビル7階 富士貿易株式会社

東京都千代田区神田寺町2-3

小橋市役所内町1-20

東京都中央区千代田5-5-16

東京都千代田区神田上台町11-2 第1東京ビル

東京都千代田区神田錦町1-19

東京都港区六本木1-4-13

東京都港区赤坂1-9-1

東京都千代田区神田佐久間町1-21 山伝ビル

東京都千代田区新宿3-1-1 北の森ビル

東京都港区台子川町1-105

東京都江戸川区小寺川1-2-2

東京都港区六本木1-6-15-10 南京印刷所

東京都千代田区内神田1-15

東京都港区新橋5-2-7 三光ビル

東京都港区芝八丁戸町38 日本ガス協会ビル

高島市根津町467

東京都港区千代田区2-1-3

東京都港区江戸川区松江1-11-15

横浜市鶴見区鶴見町1506

神戸市垂水区松本町22-1

東京都千代田区四番町5

東京都中央区築地1-4-2 第三ビル

東京都中央区八重洲2-3-3 八重洲口会館

東京都中央区日本橋住吉町2-8 古河ビル

東京都港区六本木1-2-110 ローズマンション302号室

東京都杉並区上高井戸3-7-32

東京都中央区芝浦町2-3-4

大阪市北区3-2-1

東京都港区六本木1-11-10 六本木富士ビル

東京都港区芝浦25号地

東京都港区芝浦4-14-25 第55号ビル

東京都港区芝浦3-3-292

八田市松戸町1-3

東京都港区芝浦4-3-8 虎ノ門楽園会館 深田オルベージュ株式会社

東京都中央区銀座西7-7-6 株式会社ビデオプロモーション

東京都中央区銀座3-1-25 株式会社 中村製紙所

東京都港区大手町2-3-6 タイムライフビル

東京都港区神田小川町3-20-2 増田ビル

東京都港区江東区5-6-4 有明ビル

東京都中央区日本橋大伝馬町2-1-1

東京都港区芝浦4-2-5 震極ビル3002号室

東京都港区丸の内2-5-1

東京都港区台東区上野3-13-9

東京都港区西台1-1

東京都港区芝浦4-1-14

東京都港区芝浦4-1-12 丸石ビル

東京都港区芝浦1-7-17

(44)
うみ（日仏海洋学会誌）
第11巻（1973年）

緒 目 次

第 1 号

原 著
大洋における光学的性質に関する
研究（英文）…………………松生 治 1〜44
カタクチイワシの灯下における
むれ形成について…………井上 実・菅倉邦夫 45〜54
人間の目に対する物体の水中視覚
（英文）…………津田美幸 55〜58
学会記事………………………………………………59〜60

第 2 号

原 著
海洋水中での炭酸酸度とその生態的意義
…………………高橋正征・村村俊夫 61〜64
沖縄県名護沖堆積物中の炭酸塩鉱物と粘土鉱物
（英文）…………青木三郎 65〜69
東京湾の珪藻プランクトン群集の遷移
…………………丸茂隆三・村野正昭 70〜82
インド洋におけるDSLの生物的挙動研究—II.
水平分布と垂直分布…………増田英彦
田中正明・松村 勝利 83〜89

シンポジウム
第1回潮汐シンポジウム
1. 赤潮シンポジウム
について………………………佐々木忠義 91〜92
2. 赤潮生態学について……………辻田時美 92〜99
3. 海産硅藻類の生物群集
について…………吉田多磨夫 99〜102
4. 黄緑藻の生態学に於ける測定
群集の遷移から見た広島湾の荒菅藻
化…………荒川好満 103〜108
5. 赤潮防除対策…………………中村 充 108〜113

La mer （Bulletin de la
Société franco-japonaise
d’oceanographie）
Tome 11 （1973）

Sommaire

Numéro 1

Notes originales
A Study on Optical Nature in
Oceanic Waters……………Kanau MATSUKE 1〜44
Schooling Mechanism of Anchovy Under
a Lamp（in Japanese）…Makoto INOUE
and Kunio SASAKURA 45〜54
The Visibility of Underwater Objects to
the Human Eye……………Ryoei TSUDA 55〜58

Procès-Verbaux ………………………59〜60

Numéro 2

Notes originales
Dark Fixation of CO₂ and its Ecological
Meaning in the Ocean（in Japanese）…
…………… Massyuki TAKAHASHI
and Shun-El ICHIMURA 61〜64
Carbonate and Clay Minerals in the Sediments
of Nago Bay, Okinawa Prefecture,
Japan…………………Saburo AOKI 65〜69
Succession of Plankton Diatoms in Tokyo
Bay（in Japanese）………Ryuzo MARUMI
and Masaki MURANO 70〜82
Biological Studies on the Deep Scattering
Layer in the Indian Ocean—II. Hori-
zontal and Vertical Distribution of Ani-
mal Constituents of DSL（in Japanese）
……………Tatsuyoshi MASUDA,
Masaki TANAKA and Sri RAHAGI
83〜89

Symposium
The 1st Symposium on the Red Tide
（in Japanese）
1. On the Red Tide Symposium ……………
……………Tadayoshi SASAKI 91〜92
2. On Red Water Ecology ……………………
……………Tokimi TSUJIT 92〜99
3. Bioconcentration in Marine Diatoms…
……………Tamao YOSHIDA 99〜102
4. Aspects of Eutrophication in Hiro-
shima Bay Viewed from Transition of
Cultured Oyster Production and
Succession of Marine Biotic Com-
munities（in Japanese）…Kohman Y. ARAKAWA 103〜108
5. Preventive Countermove of Red Tide
……………Makoto NAKAMURA 108〜113

（1）
| 6. 湘南内海の高栄養化と赤潮…岩崎英雄 113～118 |
| 7. 既存の異食場における 赤潮対策…河田邦彦 118～121 |
| 8. シルシ・ポンプによる浚渫工法について…園田武彦 121～124 |
| 9. ヒトデの処理処分法について…清水博 124～126 |
| 10. 廃棄汚泥処理と汚泥堆積の再利用…黒田二郎・佐藤清茂 127～133 |

学会記事……………………………………134～136

Procès-Verraux…………………………134～136

---

**Notes originales**

Photosynthetic Response of Estuarine Phytoplankton to Salinity Variations in their Habitat …Osamu MAEDA, Masakazu SAWADA, and Shunsui ICHIMURA 137～140

Equatorial Upwelling due to the Wind Stress and Density Distribution…Koji HIDA 141～146

Microbial Respiration in Marine Environments during Summer…Humitsu SEKI 147～152

Red Tide of *Oikopleura* in Saanich Inlet…Humitsu SEKI 153～158

---

**Compte rendu**

Recent Studies on the Thermal Regime of Arctic Sea Ice (in Japanese) …Tatsuo HASEMI 159～171

---

**Documentation**

The Second International Congress on the History of Oceanography, Challenger Expedition Centenary (in Japanese) …Takahisa NEMOTO 172～180

---

A l'occasion d'avoir reçu le prix de la Société franco-japonaise d'océanographie Studies on Facial Bones of Fish, Specially Regarding Feature of Urohyal (in Japanese) …Takaya KUSAKA 181～182

---

Procès-Verraux 183～187
総 目 次

第 4 号

原 著
定常波による砂礫生成と砂粒子の移動限界について……………………阿部友三郎・新井正一 189～195
本学御溝の地球物理学的考察——牛込夢の静脈について（第 2 審）——（英文）……………………………………森谷敏生・阿部友三郎 196～204
鉄分の水珠に対する影響（英文）……………………………………飯高勇之助・津田良平・森永 動 熊井英水 205～210

寄 稿
速さの変化に対するサポニンス・ロータの反応——予備試験——高野健三・松山佐和 211～212

総 説
水質におけるキチン分解菌とそれらの活性に関する生物学的研究（英文）……………………………………Mary A. HOOD and Samuel P. MEYERS 213～229

学会記事…………………………………………………… 231～232
総目次（第11巻）

Numéro 4

Notes originales
On the Sand Ripple Generated by Standing Wave and the Threshold Movement Sand (in Japanese)……Tomosaburo ABE and Masakazu ARAI 189～195
A Geophysical Consideration of the Water in the Ushigomebori Moat——On the Seiche Motion of the Moat (II)——Nobuo MORITANI and Tomosaburo ABE 196～204
Effects of Slag on Aquatic Life…………………Yunosuke IITAKA, Ryoeji TSUDA, Tsumo MORINAGA and Hidemi KUMAI 205～210

Miscellanées
Réponse d’un moulinet de Savonius à l’écoulement variable en temps (en Japonais) …………………Kenzo TAKANO et Sawa MATSUZAWA 211～212

Compte rendu
The Biology of Aquatic Chitinolytic Bacteria and their Chitinolytic Activities …………………Mary A. HOOD and Samuel P. MEYERS 213～229

Procès-Veraux ……………………………………… 231～232
Sommaire du Tome 11

(3)
SAVE YOUR MONEY

thru NAKAGAWA’s Cathodic Protection
& ZAPCOAT (inorganic zinc rich paint)
for valuable marine equipment & offshore structures

For complete information, write or cable:

NAKAGAWA CORROSION PROTECTING CO., LTD.
2-1, Kanda-Kacho, Chiyoda-ku, Tokyo
(Tel: Tokyo 252-3171)
Cable: NAKAGAWABUSHIKU TOKYO

水路 測量と土質調査

Hydrographic Survey and Marine Geological Survey

SANYO Hydrographic Survey Co., LTD.

業務
深浅測量，底質土質調査，国土保全測量調査，海洋資源開発測量調査
防災工事測量調査，マイルポストの測量，航海保安に必要な調査，海底ケーブル設
設測量調査，潮汐，潮流，海流，波浪の観測
一般海洋観測調査，その他一般海事関係の観測調査および関係業務の技術，科学的
研究

特色
高性能の精密計器機の整備充
元海上保安庁職員をもって組織する優秀なる我国唯一の技術陣
総代理店（連絡先）は全国的範囲網を持つ三井物産 K. K の本，支店出張所

三洋水路測量株式会社

東京都港区新橋 5丁目 23番 7号
電話 (432) 2571-4
Exploiting the Ocean by...

T.S.K.
OCEANOGRAPHIC INSTRUMENTS
REPRESENTATIVE GROUPS OF INSTRUMENTS AND SYSTEMS

深海テレビ用油圧巻上機
（通産省工庁技術院地質調査所納入）

1. 概要
中・深海における海底テレビ観測を目的とした専用スペインで同軸アーマードケーブル17.2m/m³×6700mを整一に巻込みリーバース型巻付ドラムを装備し、油圧で巻き上げ巻き下げ、および曳航時のオーバーディションに対し自動出を等を行い、その制御はすべてエレクトロヒドロ方式により遠隔リモートコントロールが可能であります。

2. 要目
1) 巻上能力 ドラム巻ぶ数に於て 6.3 ton×58 m/min
2) 油圧動力発生馬力 129 ps
3) パワーユニット駆動電動機 75 kw 2台
4) 曳航用エアーコンデンション装置範囲 約3.5 ton～8 ton 任意調節可能
5) 速度制御範囲 停止～最高速度まで無段連続制御可能
6) 重量 巻上機本体（ケーブル含む） 約 23 ton
   主パワーユニット 約 4.5 ton
   曳航ブレーキ用パワーユニット 約 0.8 ton

THE TSURUMI SEIKI CO., LTD.
1506 Tsurumi-cho Tsuru-mi-ku, Yokohama, 郡230 Japan

TELEPHONE TSK. USA.
CABLE ADDRESS 045-521-5252～6 3510 Kurtz St.,
TSURUMISEIKI Yokohama TLX; 3823750 TSK JPN J San Diego, Calif., 92110, U.S.A
IWAMIYA INSTRUMENTATION LABORATORY
メルタック

熱溶融型接着剤ですから、溶剤や水を含まないので乾燥の必要がなく、
瞬時に接着します。
ポリエチレン、アルミ箔等にも良く接着します。

ポリロック

含浸、注型、充填用として使用される接着剤と作業性の良好なレーニン
グ材です。

ポリワックス

ワックスを主成分とし、各種ボリマーをブレンドした防湿、密封用のレ
ーニングワックスです。

東京工材株式会社
東京都中央区築地4-7-1 TEL (542) 3361（代）

アクアラング

最新式アクアラング器具一式

フーカー潜水具

カタログ進呈

・カタログ進呈

フーカー潜水具

日本アクアラング株式会社

東京支社 東京都港区北山手3丁目15-1
名古屋支社 名古屋市中区栄1-3-1

電話 (03) 340-3407

日本アクアラング株式会社

東京支社 東京都港区北山手3丁目15-1
名古屋支社 名古屋市中区栄1-3-1

電話 (03) 340-3407

電話 (052) 236-8026 (代表)
長期捲自記流速計
(NC-II)

本流速計は海中に設置し、内蔵した記録器に流速流向を同時に記録するプロペラ型の流速計で約20日間の記録を取り事が出来ます。但し流速は20分毎に3分間の平均流速を又流向は20分毎に一回、共に棒グラフに記録しますから読取が非常に簡単なのが特徴となっています。

プロペラはA、B、C三枚一枚となって居り
A(弱流用)……1m/sec
B(中流用)……2m/sec
C(強流用)……3m/sec
迄で一枚毎に検定してあります。
弱流ペラに依る最低速度は約4cm/secです。

フース型長期捲自記検潮器
(LFT-III)

営業品目
階段抵抗式波高計
ケーブル式波高計
フーツ型検潮器
小野式自記流速計
自記水位計
港施型土圧計
理研式水中カメラ
その他海洋観測諸計器

協和商工株式会社
東京都豊島区目白4丁目24番地1号
TEL(952)1378 代表 〒171

Direct-Reading Current & Direction Meter

CM-2

Catalogues are to be sent immediately upon receipt of your order products

Products

KM-2: Direct Reading Knot-Meter for Trawl-Boats to Control Adequate Speed

EI-5: Electric Meter of Water Temperature

EST-5: Electric Conduction and Temperature Meter for Chlorine

TOHO DENTAN CO., LTD.
Office: 1-8-9 Miyamae, Suginami-Ku, Tokyo. Tel Tokyo (03) 334-3451-3

AUTO-LAB PORTABLE S-T BRIDGE
Model 602

オート・ラブ製導出式精密塩分計に続いて、開発された温度と塩分の現場測定用の可搬型海
洋測器です。温度、塩分ともダイアルで直読出
来、簡便で堅牢しかも高精度なソリッドステー
トのユニット結合構造の最新測定器です。

温度: 0~35°C ±0.1°C

塩分: Scale 1. 0~32 % S 確度 ±0.1 % S

Scale 2. 32~42 % S 確度 ±0.03 % S

電源: 電池 9V, 200時間使用可能

製造品目

転倒温度計 各種
電気式水温計 各種
採水器 海洋観測機器
気象用・理化学用温度計
サーキュレーター 溫度調節器

株式会社 渡部計器製作所
東京都文京区向丘1の7の17
TEL (811) 0044 (代表) 113

日本およびアジア総代理店

（カタログ御希望の方は事務局へお申し付け下さい）
ながい経験と最新の技術を誇る！
大洋の船舶用電気機器

主要生産品目
自助・他助交流発電機
直流発電機
各種電動機及制御装置
船舶自動化装置
配電盤

大洋電機株式会社

取締役社長 山田 沃三

本 社 東京都千代田区神田錦町3の16
電話 東京 (293) 3061～8
岐阜工場 岐阜県羽島郡笠松町知月町18
電話 笠松 4111～5
伊勢崎工場 群馬県伊勢崎市八斗島町726
電話 伊勢崎 1815・1816・1835・816
下関出張所 下関市竹崎町3099
電話 下関 (22) 2820・3704
北海道出張所 札幌市北二条東二丁目 津軽ビル
電話 札幌 (025) 6347(23)8061・8261
ヨシダの海洋試験機

(高圧ポンプ)

水圧試験装置

圧力

(高圧テスト容器)

水圧試験装置

圧力

株式

吉田製作所

東京都台東区上野3丁目13番9号 電話 (832) 4351～5

は無限の可能性に挑戦する

急冷電子機器

航空計器

海洋開発機器

試験機関用電子機器

各種制御機器

コンピュータ端末機器

各種情報システム

エレクトロニクスで創進する

吉野電気株式会社
Notes originales

On the Sand Ripple Generated by Standing Wave and the Threshold Movement Sand (in Japanese) ………………… Tomosaburo ABE and Masakazu ARAI 189

A Geophysical Consideration of the Water in the Ushigomeboki Moat—On the Seiche Motion of the Moat (II) … Nobuo MORITANI and Tomosaburo ABE 196

Effects of Slag on Aquatic Life …………………………Yunosuke IITAKA, Ryohsei TSUDA, Tsutomu MORINAGA and Hiidemi KUMAI 205

Miscellanées

Réponse d’un moulinet de Savonius à l’écoulement variable en temps (en Japonais) ……………………………… Kenzo TAKANO et Sawa MATSUBAYAMA 211

Compte rendu

The Biology of Aquatic Chitinolytic Bacteria and their Chitinolytic Activities ……………………………… Mary A. HOOD and Samuel P. MEYERS 213

Procès-Veraux …………………………………………………… 231

Sommaire du Tome 11